

目 次

- 第1章 総則
- 第2章 学位授与の要件
- 第3章 履修について
- 第4章 授業について
- 第5章 試験について
- 第6章 成績について
- 第7章 博士論文の公表について
- 第8章 学修上の倫理に反する行為について
- 第9章 その他

第1章 総則

(趣旨)

第1条 この教則は、明星大学大学院学則（以下「学則」という。）第3条の3他、明星大学大学院学位規則（以下「学位規則」という。）に基づき、研究科又は専攻の人材の養成に関する目的及びその他教育研究上の目的等、並びに明星大学大学院（以下「本大学院」という。）の学生の学修について必要な事項を定める。

(適用)

第2条 この教則は、本大学院の研究科に在籍する学生（以下「学生」という。）に適用する。ただし、学則第46条及び第47条により入学を許可された者は除く。

(人材の養成に関する目的等)

第3条 本大学院の定める学則第3条の3に基づき、研究科又は専攻（以下「専攻等」という。）の人材の養成に関する目的等は、別表第1に定めるとおりとする。

2 学位授与方針、教育課程編成・実施方針、及び入学者受け入れ方針は、別表第2、別表第3、及び別表第4に定めるとおりとする。

第2章 学位授与の要件

(修士学位授与要件等)

第4条 学則第25条第1項に基づき、各研究科委員会が定める学位授与の要件は、別表第5のとおりとする。

第5条 学位規則第3条に基づき、各研究科委員会が定める修士学位論文の主題等の提出時期は、別表第6-1のとおりとする。

第6条 学位規則第4条に基づき、各研究科委員会が定める修士の学位授与の申請時期は、別表第6-2のとおりとする。

(博士学位授与要件等)

第7条 学則第26条第1項に基づき、各研究科委員会が定める学位授与の要件は、別表第5のとおりとする。

第8条 学位規則第12条に基づき、各研究科委員会が定める博士学位論文の主題等の提出時期は、別表第7-1のとおりとする。

第9条 学位規則第13条に基づき、各研究科委員会が定める博士の学位授与の申請時期は、別表第7-2のとおりとする。

(休学中の学位授与の申請)

第10条 休学中の者は、学位授与の申請を行うことができない。

第3章 履修について

(履修登録)

第11条 学生は研究指導教員の指導を受け、学則第18条に基づき、毎学年次のはじめの指定された期間に履修しようとする授業科目の登録（以下「履修登録」という。）を行わなければならない。

2 履修登録をしていない授業科目は、単位を修得することはできない。

3 研究科長が必要と認めたとき、第1項に定める指定の期間以外に、履修登録をした授業科目の追加又は取消しを行うことができる。

(履修登録の条件)

第12条 履修登録できる授業科目は、入学年度に定められた教育課程に設置されたもののみとする。

2 前項にかかわらず、転研究科転専攻した者が履修登録できる授業科目は、転研究科転専攻した学年に定められた教育課程に設置されたもののみとする。

3 同一科目を重複して履修登録すること、及び既に単位を修得した授業科目を履修登録することはできない。

(再履修)

第13条 学生は、当該年度に履修した科目の単位を修得できなかった場合、再度履修登録すること（以下「再履修」という。）ができる。

(聴講)

第14条 学生は、単位修得を目的とせずに、本学が開設する授業科目を受講すること（以下「聴講」という。）ができる。

2 聴講を希望する学生は、在学生聴講許可願により当該授業科目を担当する教員の許可を得たのち、教務ユニットに届け出なければならない。

第4章 授業について

(開講期間による授業科目の種類)

第15条 開講期間による授業科目の種類は、次の各号に定めるとおりとする。

- (1) 通年科目 : 学年30週にわたって開講する科目
- (2) 春学期科目 : 春学期15週にわたって開講する科目
- (3) 秋学期科目 : 秋学期15週にわたって開講する科目
- (4) 集中講義科目 : 一定期間に集中して開講する科目

(授業時間)

第16条 授業を行う時間帯は、次の各号に定めるとおりとする。

- (1) 1時限目 9:00~10:30
- (2) 2時限目 10:45~12:15
- (3) 3時限目 12:55~14:25
- (4) 4時限目 14:40~16:10
- (5) 5時限目 16:25~17:55
- (6) 6時限目 18:10~19:40

(緊急時の措置)

第17条 台風・大雪・地震等の各種自然災害、大規模な事故・ストライキ等による交通機関の運行停止及びその他不測の緊急事態の発生又は発生が予測される場合、学長は授業の中止、休講又は短縮等の措置をとることができる。自然災害等に伴う授業の休講措置については、明星大学自然災害等に伴う授業の休講措置等に関する取扱細則に定める。

(学修等に関する情報伝達)

第18条 学修等に関する情報伝達は、原則として、本学の所定の掲示板にて行う。ただし、必要に応じて、本学のウェブサイト等を使って情報伝達を行う。

第5章 試験について

(試験)

第19条 学則第19条に定める「試験」とは、主として学期末に行う試験をいう。ただし、授業科目によっては、授業期間内で随時行うことがある。

2 試験には、レポート等成果物によるものを含む。

(レポート等成果物の提出)

第20条 学生は、レポート等成果物を提出する場合、当該授業科目の担当教員の指示に従い、指定された期日までに指定された場所に提出しなければならない。

(受験)

第21条 試験を受験する学生は、試験監督者の指示に従わなければならない。

2 前項に定めるもののほか、学生は、次の各号に定める事項を遵守しなければならない。

- (1) 学生証を携行し、机上に提示すること。学生証を忘れた者は、大学の指定する方法で身分を証明すること。
- (2) 受験のために使用を許可されたもの以外の物品は、指示された場所に置くこと。
- (3) 答案用紙には、氏名及び所属する研究科・専攻・学籍番号を明瞭に記入すること。
- (4) 配布された答案用紙等は、退出の際に必ず提出すること。

3 原則として、試験開始後20分を超えて遅刻した場合、当該授業科目の試験を受験することはできない。

第6章 成績について

(成績の評価)

第22条 学則第20条に定める各授業科目の成績の評価、評語、評価点数及び評価基準は、別表第8-1のとおりとする。

2 修得した成績の評価を取り消すことはできない。

(成績評価確認)

第23条 学生は、成績の評価に対し確認を申請するときは、別表第8-2に定める条件を満たした場合のみ当該成績に係る評価を確認することができる。

2 成績評価の確認を申請する学生は、指定された期間内に必要な手続を行わなければならない。

(GPAによる成績評価)

第24条 GPA（グレードポイントアベレージ）とは、履修登録したGPAの対象となる授業科目（以下「GPA科目」という。）の成績の評語ごとにGPを付して当該授業科目の単位数を乗じ、その総数をGPA科目の総単位数で除した値のことをいう。

2 本学が定めるGPは、別表第8-1のとおりとする。

3 GPAは小数点第3位を四捨五入し、小数点第2位までの数値で表す。

4 不合格科目を再履修した場合、再履修の評価が前の評価に上書きされ、上書きされる前の当該単位数は総履修登録単位数から除外される。

5 GPA科目は、原則として、学則第20条第3項に定める単位認定科目を除く科目とする。

第7章 博士論文の公表について

(公表の方法)

第25条 学位規則第22条に定める博士学位論文の公表は、本学の機関リポジトリの利用により行うものとする。

2 本学の機関リポジトリの利用について必要な事項は、別に定める。

第8章 学修上の倫理に反する行為について

(学修上の倫理に反する行為)

第26条 学則第45条に定めるもののほか、学修上の倫理に反する行為は、次の各号に定めるとおりとする。

- (1) 他人のアイデアの盗用等、レポート等成果物提出の際の不正行為
- (2) その他、前号に定める行為に準ずる行為

2 前項に定める行為があった場合は、学長又は当該学生が所属する研究科長が関係部署の意見を聴いて、厳重注意等を行うことができる。

3 前項の定めにかかわらず、学長が、第1項に定める行為について、重大又は悪質であると判断した場合、明星大学学生の懲戒に関する規程に基づき処分することができる。

第9章 その他

(委任)

第27条 この教則に定めるもののほか必要な事項は、学長が定める。

(改廃)

第28条 この教則の改廃は、大学評議会の議を経て、学長が行う。

附 則

この教則は、平成26年4月1日から施行する。

附 則

この教則は、平成27年4月1日から施行する。

附 則

この教則は、平成29年4月1日から施行する。

附 則

(施行期日)

1 この教則は、平成30年4月1日から施行する。

附 則

(施行期日)

1 この教則は、2019年4月1日から施行する。

附 則

(施行期日)

1 この教則は、2020年4月1日から施行する。

附 則

(施行期日)

1 この教則は、2021年4月1日から施行する。

附 則

(施行期日)

- 1 この教則は、2022年4月1日から施行する。

附 則

(施行期日)

- 1 この教則は、2023年4月1日から施行する。

附 則

(施行期日)

- 1 この教則は、2024年4月1日から施行する。
- 2 この教則は、2024年度入学生より適用する。ただし、改正後の第17条及び第21条は、改正日以前に在籍していた者にも適用する。

附 則

(施行期日)

- 1 この教則は、2025年4月1日から施行する。
- 2 この教則は、2025年度入学生より適用する。

附 則

(施行期日)

- 1 この教則は、2025年6月1日から施行する。

附 則

(施行期日)

- 1 この教則は、2026年4月1日から施行する。
- 2 この教則は、2026年度入学生より適用する。ただし、改正後の第22条、第23条、第24条、別表第8-1及び別表第8-2は、改正日以前に在籍していた者にも適用する。

別表第1（研究科・専攻の人材の養成に関する目的）

別表第2（研究科・専攻の学位授与方針）

別表第3（研究科・専攻の教育課程編成・実施方針）

別表第4（研究科・専攻の人材の入学者受け入れ方針）

別表第5-1～別表第5-7（学位授与の要件 理工学研究科～建築学研究科）

別表第6-1及び別表第6-2（修士学位請求論文の主題等の提出時期、修士学位授与の申請時期）

別表第7-1及び別表第7-2（博士学位請求論文の主題等の提出時期、博士学位授与の申請時期）

別表第8-1（成績の評価、評語、評価点数、評価基準及びGP）

別表第8-2（成績評価確認 申請条件）

別表第1 研究科・専攻の人材の養成に関する目的

1. 理工学研究科	理工学研究科は、企業・研究所等において、企画・設計・研究開発等を行うための高度な専門技術と知識をもち、将来に向けた新たな研究テーマの発掘及び設定、並びに研究計画の立案及び実行といった研究のマネジメントができる専門的職業人と研究者を育成する。 本研究科各専攻の人材養成の目的は、以下の通りである。 (1) 物理学専攻 物理学専攻は、物理学の特徴である「原理・原則に立ち返って事象を把握・分析し、合理的に判断できる思考方法」を身につけ、理学と工学の両面から問題を俯瞰し総括できる広い視野と、理論のみならず実験を重視しつつ問題解決策を探り、それを実践する行動力を持った人材を養成する。 ①博士前期課程 博士前期課程では、一つのテーマを深く研究して自然に対する理解を深めることを通して、自ら専門性を深めていく力、複雑な情報を整理・考察し、人に分かりやすく伝える力を有し、人との相互理解を深め、良い人間関係を築く力があり、学術分野のみならず社会活動においても、リーダーシップを発揮できる実践的な能力を有する専門職業人を養成する。 ②博士後期課程 博士後期課程では、博士前期課程で身につけた能力に加えて、一段と深い物理学の学識をもって、幅広い領域で自立して研究していける専門家、研究者を養成する。 (2) 化学専攻 化学専攻は、実験研究の各段階(調査、計画、実施、結果の分析及び考察)を信頼性のある手法を用いて進めることのできる人材を育成する。 ①博士前期課程 博士前期課程では、化学の発展に寄与する研究開発に加わることができる学識と、実践する実験手法の専門性を備えた研究者や専門技術者を育成する。 ②博士後期課程 博士後期課程では、さらに研鑽を積みより深い学識と計画の立案及び具現化までに至る研究手法を身につけ、自立した研究活動を行うに必要な能力や、高度に専門的な業務をリードする能力を備えた人材を育成する。 (3) 機械工学専攻 機械工学専攻は、機械工学に関する高いレベルの専門知識を有するとともに、先進的な研究を通じて高度の問題解決力及び独創力を身につけた、日本の産業界の競争力強化に寄与できる人材を育成する。 ①博士前期課程 博士前期課程では、高度な専門知識と問題解決力、独創力とを兼ね備えて、開発、設計及び生産技術分野はもとより、機械製品のリサイクルに至るまで、機械工学の技術者が必要とされる幅広い分野で活躍できる専門的職業人を育成する。 ②博士後期課程 博士後期課程では、独創的で先進的な研究を自立して遂行する能力を身につけ、グローバルに評価される新技術や新製品の研究開発を幅広い分野で主体的に行うことができる専門的職業人及び研究者を育成する。 (4) 電気工学専攻 電気工学専攻は、能動的に専門知識を高めるとともに研究を行う態度を身につけ、国内及びアジア諸国の種々の技術的問題を理解し、その解決に取り組むことができる実行力を持った人を育成する。 ①博士前期課程 博士前期課程は、電気工学分野における、応用力を持った高度専門的職業人を育成する。 ②博士後期課程 博士後期課程は、高度の研究能力を持つ自立した電気技術者を育成する。 (5) 環境システム学専攻 環境システム学専攻は、国内及びアジア諸国の環境問題を総合的に理解・分析し、問題解決に取り組む実行力とチームワーク力、技術者としての倫理感を持つ環境技術者及び企業等における研究者を育成する。 ①博士前期課程 博士前期課程は、環境分野における広範で高度な知識を持つとともに、それを問題解決に向けて応用することができ、かつ技術者倫理を有する環境技術者(21世紀の環境プロフェッショナル)を育成する。 ②博士後期課程 博士後期課程は、より高度な研究能力を持ち、プロジェクトチームや組織の中で、リーダーシップを発揮することができる自立した環境技術者及び研究者を育成する。
------------------	---

2. 人文学研究科	人文学研究科は、変動著しい環境下に置かれた「人間」とその人間が作り出す「文化」や「社会」に関する諸問題を、専門領域の視点から理論的・実証的に研究し、解明することを目指し、高度な専門性と豊かな人間性を備えた専門職業人として社会に貢献する事のできる人材を育成する。 (1)国際コミュニケーション専攻 人文学研究科国際コミュニケーション専攻では、多言語・多文化的な状況が加速する現代社会において、実践的な言語運用能力を備え、複眼的な視野で事象を分析して問題解決に取り組める高度な専門性を有する職業人及び研究者を育成する。 ①博士前期課程 博士前期課程では、実践的な言語運用能力、社会・文化の多様性の理解及び課題解決能力を身に付け、国際社会で活躍できる高度な専門性を有する職業人及び研究者を育成する。 ②博士後期課程 博士後期課程では、多言語・多文化的な現代社会を複合的・複眼的な視点から研究し、実践的な言語運用能力を用いて国際社会の共通課題をグローバルな視野に立って取り組むことができる自立した研究者、及び指導的な役割を担うことができる高度な専門性を有する職業人を育成する。
3. 情報学研究科	情報学研究科は、情報処理技術を基盤とした、産業界に通用するエンジニアリングを修得し、直面する問題の本質を見抜き、的確な解決策を見出し具体的に実現を図り、新しい時代の技術課題を解決できる能力を有する人材を育成する。 ①博士前期課程 博士前期課程では、情報学の分野において高度な専門知識を持って社会に貢献できる技術者を育成する。 ②博士後期課程 博士後期課程では、情報学の分野において高度な研究能力を持って国際社会に貢献できる自立した技術者及び研究者を育成する。
4. 経済学研究科	経済学研究科は、経済現象を論理的に分析する能力を持ち、基礎的な研究や実践的フィールドワークを通じ、経済学の先進的研究を理解した上で、専門知識を社会の中で効果的に応用し、主体的に行動できる自立性を兼ね備えた人材を育成する。
5. 教育学研究科	教育学研究科では、従前の人文学研究科教育学専攻の人材養成の目標を踏襲しつつ、「障害児者教育」及び「教科教育学」分野の充実を図り、教育の理論と実践の両面から高度な教育研究を行い、教育の本質課題に真摯に取り組むことのできる知見豊かな教育実践者及び研究者を養成する。また、博士前期課程においては、学生の希望に応じて、幼・小・中・高教諭及び特別支援学校教諭の専修免許状の取得可能な教育課程を編成し、その人材養成も併せて行う。 ①博士前期課程 教師・保育士、及び教育・保育に創造的に関わる人を育成する学部教育をベースとし、教育思想、教育課程、教育方法、教育行財政、教育心理、幼児教育、障害児者教育、教科教育学等を多面的に研究し、指導的立場で活躍できる人材を養成することを目的とする。
6. 心理学研究科	心理学研究科心理学専攻は、心理学の研究・実践を通して、知識基盤社会を支える、創造性豊かな優れた研究・開発能力を持つ研究者並びに高度な専門的知識・技能を備えた職業人を育成する。 ①博士前期課程 博士前期課程では、心理学における研究及び実践を通して、科学的な態度をもって、人間の行動と認識を探究し、現代社会が抱える問題の解決に貢献できる人材を育成する。 ②博士後期課程 博士後期課程では、心理学における研究及び実践を通して、新たな社会の創造・発展を牽引していく俯瞰力と独創性を備えた研究者を育成する。
7. 建築学研究科	建築学研究科では、学部教育から続く、建築学に関する専門知識及び実践的な技術をより高度に用いて、時代や環境の変化に対応した安全、健康かつ快適な建築、住宅及び都市空間を創出・提供することで、社会に貢献できる人材を育成する。

別表第2 研究科・専攻の学位授与方針

1. 理工学研究科	(1) 物理学専攻 ①博士前期課程 (知識・理解) 1. 宇宙物理学・天文学、物性物理学、原子核・素粒子物理学のいずれかの分野における専門知識をもち、理学・工学の分野を横断的、体系的に理解する。 (思考・判断) 2. 宇宙物理学・天文学、物性物理学、原子核・素粒子物理学のいずれかにおいて、1つのテーマをみつけ、その解決策または解決に至るには何が問題かを指摘できるようになる。 3. 理学・工学の分野を横断的に見渡すことができ、専門知識を他分野にも応用することができる。 (関心・意欲) 4. 物理学以外の活動で起こっている事象の中からでも、物理学の手法で解決できるものがあるならば、その解決策・方策等を系統的に整理して提示できる。 (態度) 5. 宇宙物理学・天文学、物性物理学、原子核・素粒子物理学のいずれかのテーマの中で得た思考や実験の結果を整理し、学内物理学系セミナーで、分野の異なる教員や大学院生、さらに学部学生にも理解できるように伝えることができる。分野によっては物理学会など、専門家による研究集会で、決められた時間内で、上記結果を発表できるようになる。 6. 自ら率先して、研究室内のセミナーや輪講の企画、実験設備の管理などを、学部学生や後輩院生を監督して円滑に運営できるようになる。学会時に他大学学生との懇親会等に参加して会話ができるようになる。 (技能・表現) 7. 現場で発生する問題・課題に対して、対処療法的ではなく、根源に立ち戻って問題の原因を見つけ、その解決方法を探ることができる。 ②博士後期課程 (知識・理解) 1. 宇宙物理学・天文学、物性物理学、原子核・素粒子物理学のいずれかの分野における専門知識を生かして、1つのテーマの解決策を与えることができるか、または、解決に至る筋道を客観的に示せる。 (思考・判断) 2. 理学・工学の考え方や原理に基づき、問題を俯瞰し総括することができる。 3. 現実の社会で発生している物理学以外の問題・事象に対しても、各分野で経験した研究手法が適用できる可能性を指摘できること、またはその問題点を整理できる。 (関心・意欲) 4. 物理学以外の活動で起こっている事象の中で、物理学の手法で解決できるものがあるならば、問題の根源に立ち戻って具体的な解決策を提示できる。できないならば、その理由を提示して、不合理な状況に陥らないように行動できる。 (態度) 5. 宇宙物理学・天文学、物性物理学、原子核・素粒子物理学のいずれかの分野の中で得た思考や実験の結果が、読者付の学術誌に英文で投稿受理されるようになる、国際会議で講演できるようになる。 6. 新たな研究テーマを自ら考え提案・研究して、未知の問題に解決策を与えられる専門的職業人として活躍できる。 (技能・表現) 7. 研究などにおいて理論を提案するだけでなく、実際にやって検証すること、または検証するための技術、具体的方法を提示できる。 (2) 化学専攻 ①博士前期課程 (知識・理解) 1. 化学分野の論文・資料の検索を通して、専門分野の研究動向を調べ、研究の背景と、研究計画の意味を理解している。 2. 化学分野の研究手法に必要な実験技術を有し、実験結果を信頼性のある方法で解析することができる。 (思考・判断) 3. 文献検索や学会活動を通して専門分野の研究動向を調べ、自らの研究の位置を判断できる科学的思考を有している。 (関心・意欲) 4. 自らの研究に関連する研究報告例と対比しながら、着実に研究を進める関心の継続が有り、研究を進展させる意欲を、研究手法の工夫として実践している。 (態度) 5. 高い倫理観をもって実験・研究を進めることができる。 (技能・表現) 6. 策定された研究手法のもとに着実に実験を進め、信頼性のある分析を経て、研究成果を挙げている。 7. 研究成果が、論文発表や学会発表により、客観的に評価されている。 ②博士後期課程 (知識・理解) 1. 経常的に文献検索を進め、専門分野の研究動向を把握して学識を深めている。 2. 専門分野の研究を、一般に解説することができる。 3. 化学分野の共通語である英語で、論文を執筆・発表する経験を積んでいる。 (思考・判断) 4. 専門分野の学識を背景に、自ら計画を立てて実験を実施し、結果の解析の精度の向上に努めて、研究手法の高度化を図ることができる。 (関心・意欲) 5. 専門分野に関わる関連分野にも、文献検索の幅を広げ、共同研究や学会活動を通して、他の研究機関の研究者と交流し、将来の課題を考えることができる。 (態度) 6. リーダーシップをもってチームの実験・研究に貢献することができる。 (技能・表現) 7. 論文発表や学会発表を進め、批判を受け入れて、より確実な研究手法への発展を図ることができる。 8. 専門分野の研究で、高度な実験手法と解析手法を表わすことができる。 9. 自ら研究を実施し、研究手法を実証している。 10. 自らの研究目的の、社会に於ける意義を明らかにすることができる。
-----------	--

(3) 機械工学専攻 ①博士前期課程 (知識・理解) 1. 材料力学、機械力学、流体力学、熱力学を体系的に理解して、現実の事象に適合したモデルの設計・解析を行う技術を修得している。 2. 測定や加工などの研究手法・実験技能を身につけている。 (思考・判断) 3. 具体的かつ詳細な研究計画を立案し、当該研究計画に基づき実験及び解析をやり遂げることができる。 4. 問題に対する解決策を論理的及び実験に基づく検証により導き出すことができる。 (関心・意欲) 5. ディスカッションを通じて、研究手法、実験手法、解析手法に創意工夫を加えることができる。 6. 国内外の学術研究論文や企業訪問を通して、専門分野の先進的な研究、研究に必要となる近隣分野の情報を収集し、取捨選択することができる。 (態度) 7. 指導教員等と円滑なコミュニケーションを図りながら、リーダーシップをもってチームの研究に貢献することができる。 8. 技術者としての高い倫理観を有している。 (技能・表現) 9. 4力学に基づいて、さらにそれぞれを複合したデザイン・加工分野、エネルギー・環境分野、システム・制御分野を選択し、学生が選択した分野において、研究手法・実験技能を身につけている。 10. 機械工学分野の専門知識と高い技術力を用いて、既存の製品の問題を発見することができる。 11. 科学技術の発展と多様化に対応できる論理的思考力と文章力、プレゼンテーション能力を有している。 ②博士後期課程 (知識・理解) 1. 当該分野の具体的な製品モデルの設計・解析を行う技術を修得している。 2. 問題の中から自ら課題を設定し、自立して研究計画を立て、研究を実施することができる。 (思考・判断) 3. 既存の研究・技術を組み立てて、新たな技術を創出することができる。 (関心・意欲) 4. 専門分野の先端研究等と自らの研究の比較を通じて、より独創的な研究開発を行うことができる。 (態度) 5. 独創的で先進的な研究を熱意と忍耐力を持ってやり遂げることができる。 6. 技術者としての社会的責任を自覚し、高い倫理観をもって実験・研究に従事することができる。 7. 同テーマを遂行する学部生・大学院生前期課程等への研究チームリーダーの役割を通じて、当該分野の人材育成に貢献することができる。 (技能・表現) 8. 機械工学分野の専門知識と高い技術力をもって、独創的で競争力のある製品を開発することができる。 9. 日本の産業界の活性化につながる研究成果を専門分野で学術論文誌に投稿、及び関連分野での国際学会で英語にて発表することができる。
(4) 電気工学専攻 ①博士前期課程 (知識・理解) 1. 研究を行うために必要な電気工学に係る基礎的な知識と、実験及びデータ解析に必要な技術を有している。 2. 国内外・国際的における技術的問題を理解し、説明することができる。 (思考・判断) 3. 研究又は問題解決に必要な情報・技術を取捨選択し、コントロールすることができる。 (関心・意欲) 4. 自らの研究テーマを理解し、課題解決ができる。 (態度) 5. 試行錯誤をして、問題解決に立ち向かうことができる。 (技能・表現) 6. 実験・データ解析結果を活用し、より深い研究に取り組むことができる。 7. 研究成果を出すために必要な情報や技術を取捨選択・コントロールする情報マネジメントを学んでいる。 8. 実験やデータ解析結果等に基づき、論理的に問題解決策を導き出すことができる。 9. 問題発見から解決策の提案までを論文又は口頭でまとめることができる。 ②博士後期課程 (知識・理解) 1. 国際会議で発表できるレベルの研究と合わせて英語力を有している。 (思考・判断) 2. 技術革新につながる研究テーマを自ら設定する企画力を有し、自立して研究計画を立案・実施することができる。 (関心・意欲) 3. 技術的問題の中から、自らが研究するテーマ・課題を発見することができる。 (態度) 4. 技術的問題に対し、グローバルな視点から俯瞰することができる。 (技能・表現) 5. 将来、博士の学位に匹敵する仕事をする可能性がある。 6. 高度な専門知識と技術で、技術的問題を解決することができる。 7. 自立して研究計画を立案し、研究を実施する過程を学んでいる。 8. 学術論文に匹敵する論文又は国際会議における発表に匹敵するプレゼンテーション能力を有している。
(5) 環境システム学専攻 ①博士前期課程 (知識・理解) 1. 環境分野に関する広範で高度な知識を持ち、自己の解決すべき課題の位置づけ、内容、達成方法を理解し、説明することができる。 2. 環境問題の分析・解決に必要な実験・調査（データ収集・解析方法等）を理解することができる。 (思考・判断) 3. 環境問題に関する専門知識を有し、環境問題を地域的及び地球的視点から多面的に捉える思考力を有している。 (関心・意欲) 4. 専門知識と技術を現実の環境問題の解決のために応用することができる。 (態度) 5. 継続的に技術の研鑽・専門知識の修得に励むことができる。 6. 実験・演習・研究を通して、問題解決に取り組む意欲と実践力、判断力を身につけている。 7. 技術者倫理を理解し、環境技術者として自らの倫理的な判断基準・行動原則を有する。 (技能・表現) 8. 環境問題の解決に必要な実験・分析・調査の技術を身につけ、実践することができる。 9. 問題解決のための的確なコミュニケーション力を有する。あわせて、英語で専門的なコミュニケーションをはかることができる。

	②博士後期課程 (知識・理解) 1. 博士後期課程に必要な高度の学術的知識、考察方法及び実験・調査スキルを身につけている。 (思考・判断) 2. 自ら研究テーマを設定し、研究計画の立案から実施まで、研究をマネジメントすることができる。 (態 度) 3. プロジェクトチームや組織の中で、リーダーとしてチームに貢献することができる。 4. 国内及びアジア諸国の環境問題を理解し、その問題の解決に取り組むチームに環境技術者として貢献することができる。 (技能・表現) 5. 実務者として活動するための英語力、プレゼンテーション技術、教授力を有している。
2. 人文学研究科	(知識・理解) 1. 研究課題を人文科学の基礎概念と展開の中で位置づけ、研究領域に必要な知識を理解している。 (思考・判断) 2. 人間の精神構造ならびに営みの多様性に鑑み、科学的分析力と洞察力とを相補的に駆使することにより、人文学的諸課題を解明することができる。 (関心・意欲) 3. 高度な専門的知識と技術を有する人材として、教育的指導の任に耐えられる力と倫理観を有する。 (態 度) 4. 人文学に属する諸領域の専門知識と技能を生かし、各現象に関する総合的な判断力ならびに批判力、創造的な研究能力をもって広く社会に貢献することができる。 (技能・表現) 5. 学問的に会得した高度な知識・経験・技術等を、一般社会に還元できる平易な言葉に置き換える力を有する。 6. 専門領域に関わる人間との相互批判的な交流に努める。 7. 常に新しい課題を見出し、究明しようとするチャレンジ精神を有する。 (1) 国際コミュニケーション専攻 ①博士前期課程 (知識・理解) 1. 「コミュニケーション研究領域」「言語学研究領域」「文化研究領域」「国際社会研究領域」に関する専門的な知識を身につけている。 2. 国際社会における社会・文化の多様性を理解している。 (思考・判断) 3. 情報を客観的かつ批判的に判断し、論理的に思考・分析することができる。 4. 専門分野に関する知識を体系的にまとめて、自己の研究に応用することができる。 (関心・意欲) 5. グローバルな視野に立って、国際社会の諸問題を解決しようとする意欲をもっている。 (態 度) 6. 円滑なコミュニケーション能力によって、他者と協働して問題を解決することができる。 (技能・表現) 7. 自己の研究を国内外で学会発表できる専門能力を身につけている。 ②博士後期課程 (知識・理解) 1. 博士論文作成に必要な「コミュニケーション研究領域」「言語学研究領域」「文化研究領域」「国際社会研究領域」に関する高度な専門的知識を身につけている。 (思考・判断) 2. 専門的知識や情報を論理的に思考・分析したうえで、自己の研究に活用することができる。 3. 専門領域における自己の研究の位置づけを的確に把握することができる。 (関心・意欲) 4. グローバルな視野に立って、より専門的な見地から国際社会の共通課題を解決しようとする意欲をもっている。 (態 度) 5. 国際社会における共通課題の解決に向け、異文化間の相互理解、及び他者との協働作業に取り組むことができる。 (技能・表現) 6. 国内外における学会での口頭発表や、専門誌における研究論文の発表など、自立した研究者として活動することができる。
3. 情報学研究科	①博士前期課程 (知識・理解) 1. 情報工学及び関連分野の必要な情報を入手し、精査のうえ取捨選択して、獲得した知識や専門知識を関連付けて活用することができる。 2. 情報工学及び関連分野に関する専門知識を系統的に理解し、必要なICTツールを効率的に利用して、緻密で正確な自己の主張を実現することができる。 (思考・判断) 3. 情報工学分野における現状と目標を把握し、その乖離から、解決すべき課題を発見することができる。 4. 課題の因果関係を理解し、本質を見抜くことができる。 5. 実行結果を客観的に評価し、計画を見直し次期計画に反映することができる。 (関心・意欲) 6. 情報工学のみならず、数学・自然科学に関して広い知識を有し、その内容を理解の上、情報工学と共用することができる。 7. 知的好奇心を基に専門内外のことに関心をもち、それらから着想を得て斬新な発想をすることができる。 (態 度) 8. 目的と目標を設定し、順序立てて計画し、実践することができる。 9. 自己研鑽のために普段から目標を設定してその達成の道筋を立て、邁進することができる。 10. 関連法令を遵守し、社会責任を果たすことができる。 (技能・表現) 11. 複雑な事象を整理し、構造化できる。 12. 自分の意見を論理的に構築し展開することができる。 13. 広く深い知識と経験をもとに、ICTを適切に用いて、精確に作業を進め、情報工学を実践することができる。

	②博士後期課程 (知識・理解) 1. 情報工学及び関連分野の必要な情報を入手し、精査のうえ取捨選択して、獲得した知識や専門知識を関連付けて活用することができる。 2. 情報工学及び関連分野に関する高度な専門知識を系統的に理解し、必要なICTツールを効率的に利用して、緻密で正確な自己の主張を実現することができる。 (思考・判断) 3. 情報工学分野における現状と目標を把握し、その乖離から、解決すべき課題を発見することができる。 4. 課題の因果関係を理解し、本質を見抜くことができる。 5. 実行結果を客観的に評価し、計画を見直し次期計画に反映することができる。 (関心・意欲) 6. 情報工学のみならず、数学・自然科学に関して広い知識を有し、その内容を理解の上、情報工学と共用することができる。 7. 専門内外のことに関心をもち、それらから着想を得て科学技術の発展に貢献するような独創的な考えに基づいて、それを計画的に実行する能力を有する。 (態 度) 8. 目的と目標を設定し、順序立てて計画し、実践することができる。 9. 自己研鑽のために普段から目標を設定してその達成の道筋を立て、邁進することができる。 10. 知的好奇心を基に専門内外のことに関心をもち、それらから着想を得て斬新な発想をすることができる。その際、関連法令を遵守し、社会責任を果たすことができる。 (技能・表現) 11. 複雑な事象を整理し、構造化できる。 12. 自分の意見を論理的に構築し展開することができる。 13. 広く深い知識と経験をもとに、ICTを適切に用いて、精確に作業を進め、情報工学を実践することができる。
4. 経済学研究科	(知識・理解) 1. 経済学の基礎理論を習得している。 2. 政策提言のための知見を提示することができる高度な分析手法を身に付けている。 (思考・判断) 3. 現実の経済現象および社会現象についての課題に対する洞察力と判断力を有する。 (関心・意欲) 4. 積極的に、専門分野における高い識見を持って様々な現実問題に経済学的視点から取り組む意欲を有する。 (態 度) 5. 国際化や多様化する現代の社会や組織において、自主性や協調性を持ちつつ高い職業倫理に基づいて自己の役割を果たす意欲を有する。 (技能・表現) 6. 自ら研究計画を立案し、問題発見から解決策の提示にいたる過程を他者に説明し、また論文としてまとめることができる。
5. 教育学研究科	①博士前期課程 (知識・理解) 1. 文献や資料を正確に読み、理解する能力を身につけている。 2. 関連する教科に関する深い知識を身につけている。 (思考・判断) 3. 文献や資料の読解によって得られた理論や考え方などから、教育の現場における個々の具体的な事象に適合する教育方法を演繹的に導き出す実践的な能力を身につけている。 4. 教育の現場で得られた調査結果や実践結果から、新たな法則や理論を帰納的に導き出す能力、または既存の法則や理論を検証する能力を身につけている。 (関心・意欲) 5. 崇高なるものや美なるものに対する感受性を身につけている。 6. 自然界の驚異や秩序、人間のさまざまな営みなどの、関連する教科が対象とする事象に対し、深い愛情と関心を持って接することができる。 7. 教育の対象となる者（幼児・児童・生徒・障害者）への愛情と共感を身につけている。 (態 度) 8. 時代や社会の要請に応えつつも、同時に普遍的な価値を見失わない態度を身につけている。 9. さまざまな教育観があるなかで、幼児・児童・生徒の全人格的な成長を優先的に考えることの出来る態度を身につけている。 10. 家庭や学校、地域社会における教育事象を、さまざまな学問領域の観点から多面的に批判を加え、自らの教育実践に活かすことの出来る態度を身につけている。 (技能・表現) 11. 関連する教科や専門分野に関する熱意を、他者に伝え得る論理性と客観性をもって表現することが出来る。 ②博士後期課程 (知識・理解) 1. 文献や資料を正確に読み、理解する能力を身につけている。 2. 関連する教科に関する深い知識を身につけている。 (思考・判断) 3. 文献や資料の読解によって得られた理論や考え方などから、教育の現場における個々の具体的な事象に適合する教育方法を演繹的に導き出す実践的な能力を身につけている。 4. 教育の現場で得られた調査結果や実践結果から、新たな法則や理論を帰納的に導き出す能力、または既存の法則や理論を検証する能力を身につけている。 (関心・意欲) 5. 崇高なるものや美なるものに対する感受性を身につけている。 6. 自然界の驚異や秩序、人間のさまざまな営みなどの、関連する教科が対象とする事象に対し、深い愛情と関心を持って接することができる。 7. 教育の対象となる者（幼児・児童・生徒・障害者）への愛情と共感を身につけている。 (態 度) 8. 時代や社会の要請に応えつつも、同時に普遍的な価値を見失わない態度を身につけている。 9. さまざまな教育観があるなかで、幼児・児童・生徒の全人格的な成長を優先的に考えることの出来る態度を身につけている。 10. 家庭や学校、地域社会における教育事象を、さまざまな学問領域の観点から多面的に批判を加え、自らの教育実践に活かすことの出来る態度を身につけている。 (技能・表現) 11. 関連する教科や専門分野に関する熱意を、他者に伝え得る論理性と客観性をもって表現することが出来る。 12. 関連する教科や専門分野において、他の教育従事者を指導することのできる技能と表現力を身につけている。

6. 心理学研究科	①博士前期課程 (知識・理解) 1. 心理学の多様な理論や研究方法論についての知識を修得し、複雑な人間行動のメカニズムを理解できる。 (思考・判断) 2. 適切な研究計画を立案し、データを適切に解析するための実証的・科学的な論理的思考を行うことができる。 (関心・意欲) 3. 日常的な問題に関心を向け、それを心理学の研究課題として位置付けることができる。 (態度) 4. 心理学の研究者または実践家としての倫理を身に付け、自らの専門領域だけではなく、他領域の専門家とも幅広く学術的な交流を行うことができる。 (技能・表現) 5. 研究の知見を学術論文として適切にまとめ、諸学会において発表することができ、その知見をさまざまな社会問題の解決に応用できる。 ②博士後期課程 (知識・理解) 1. 自らの専門領域に関する高度な専門的知識を修得するとともに、心理学の幅広い研究領域における今日的・発展的課題を理解することができる。 (思考・判断) 2. 独創的かつ先進的な研究計画を立案し、高度な専門的知識と技能を駆使し、データを適切に解析するための実証的・科学的な論理的思考を行うことができる。 (関心・意欲) 3. 理論的・社会的な文脈の中に自らの研究課題を位置付け、研究を進めることによって、心理学界の学術的発展を牽引できる。 (態度) 4. 研究倫理を身につけるとともに、現代社会が直面する諸課題に対して、地域社会や他領域の専門家と協働をはかりつつ、心理学の専門的立場から問題の解決に貢献することができる。 (技能・表現) 5. 自立した研究者として必要な高い研究遂行能力を身に付け、研究の知見を学術論文としてまとめ、諸学会において、発表することができる。
7. 建築学研究科	(知識・理解) 1. 建築物を取り巻く社会的背景や空間特性、機能性を読み解く力を有し、「設計・計画」「構造」「環境・設備」「材料・構法・生産」の実務に係る幅広い知見と理解力を有している。 (思考・判断) 2. 技術者倫理を理解し、種々の条件・制約を踏まえて、建築物の立案、設計、プレゼンテーションをすることができる。または、建築構造、建築材料、建築設備あるいは建設工学分野における問題を把握し、考究する能力を有している。 (関心・意欲) 3. 専門知識に基づく調査、実験、実測、解析など熱意をもって進め、協働者とコミュニケーションを図りながら、自らの設計および研究を深めてゆくことができる。 (態度) 4. 建築が社会に及ぼす影響、および設計者、技術者が社会的に負っている責任を理解した上で、自らの設計および研究の社会的意義と重要性を認識し、設計および研究における問題に対する解決策を検討することができる。 (技能・表現) 5. 計画から工事監理までのプロセスを理解し、専門家として実践するための能力を有している。また、専門知識に基づく調査、実験、実測、解析を行い、結果の整理と解釈から正しい説明を他者に対して行うことができる。

別表第3 研究科・専攻の教育課程編成・実施方針

1. 理工学研究科	(1)物理学専攻 ①博士前期課程 1. 教育課程編成の考え方 物理学専攻では、人材養成の目的を達成し、現在の物理学の幅広い研究領域に対応するため、「基礎物理学分野」「宇宙物理学分野」「物性物理学分野」を設ける。又、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。更に「研究科目」を「特論科目」「演習・実験科目」に区分する。 「特論科目」では、各分野における一般的・基礎的知識を修得させると共に、物理的思考方法を養う科目を配置する。 「演習・実験科目」では、「特論科目」で身に付けた知識や思考力を基にして、演習や実験により、複雑な現象を整理・考察する力を養う科目を配置する。 「論文指導科目」では、具体的ないくつかの研究課題や問題に対して、自ら解決策を見出し、更にそれを実践することで、自ら専門性を深めていく力を養うと共に、研究成果を人に分かりやすく伝える力を養う科目を配置する。 2. 教育内容・方法 「特論科目」では、講義と演習により授業を行う。7科目14単位を選択して修得させるため、学生は自身の専門分野以外の科目も修得しなければならない。これにより、広い視野から様々な問題を俯瞰できる力を身に付けさせ、一般的・基礎的知識を修得し、更により高度な専門的知識についても理解を深めさせることができる。 「演習・実験科目」では、演習や実験により授業を行う。理論系の科目では理論計算が主たる内容となり、実験系の科目では実験が主たる内容となる。学生の専門分野の科目を修了までの2年間にわたり、合計4科目8単位を修得させる。 「論文指導科目」では、修士論文の作成が目標となるが、実験や計算、それらの整理に加えて、文献調査、文献講読、又、研究発表に関するスキルの修得も授業内容に含まれる。1つあるいは複数の研究課題に取り組み、想定外の様々な困難を解決する体験を通して、研究者として必要な自ら専門性を深めていく力を養う。又、この科目で得た研究成果を基に修士論文の作成のみならず、更にその成果を各種学会などで発表するように指導する。学生の専門分野に基づき研究指導を行い、修了までの2年間にわたり、合計4科目8単位を修得させる。 3. 学修成果への評価 シラバスに提示された科目の学修(到達)目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、修士論文については、主査や副査を中心に論文内容の精査を行うと共に、修士論文審査会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。 ②博士後期課程 1. 教育課程編成の考え方 物理学専攻では、人材養成の目的を達成し、現在の物理学の幅広い研究領域に対応するため、「基礎物理学分野」「宇宙物理学分野」「物性物理学分野」を設ける。又、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。 「研究科目」では、各分野における高度な専門知識を修得するための科目を配置する。 「論文指導科目」では、独創性、先進性、発展性に優れ、学術的かつ社会的意義を持つ博士論文研究を実施するために不可欠な高度な研究遂行能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。 2. 教育内容・方法 博士後期課程では、博士前期課程で身に付けた能力に加えて、一段と深い物理学の学識を持って自立して研究できる専門家、研究者を養成することを目指す。 「研究科目」では、主として講義と演習により授業を行い、博士前期課程で修得した専門知識よりも更に高度な内容について理解を深めさせ、「論文指導科目」の主たる目的である博士論文の作成に必要な知識・技術を養う。「研究科目」の修了要件は4科目8単位であり、学生の専門分野の科目を修得することで博士後期課程の修了要件を満たすように設定している。 「論文指導科目」では、演習や実験により授業を行う。又、博士論文の作成に必要な文献調査、文献講読、等も含む。博士論文の執筆や、自立した研究者として物理学会、物理学関連の学会などで貢献できる物理学研究を実施するために不可欠な、高度な研究遂行能力を修得させる。学生の専門分野に基づき研究指導を行い、修了までの3年間にわたり、合計6科目12単位を修得させる。 3. 学修成果への評価 シラバスに提示された科目の学修(到達)目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、博士論文については、博士の学位申請資格について理工学研究科物理学専攻の基準を基に予備審査を行った上、提出された学位請求論文の内容の妥当性や学術的意義・社会的意義について主査と2名以上の副査により審査する。併せて、公聴会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。
------------------	---

(2)化学専攻 ①博士前期課程 1. 教育課程編成の考え方 化学専攻では、専門分野を「無機化学」「有機化学」「物理化学」「分析化学」「生化学」の5分野に大別した上で、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。更に分野ごとに、「研究科目」を「特論科目」「演習・実験科目」に区分する。「特論科目」では、各専門分野及び関連分野における最新の技術情報及び研究成果を学ぶ。「演習・実験科目」「論文指導科目」では、実際の研究を通して論文作成、学会発表を念頭に置いてプレゼンテーションの指導を行う。博士前期課程では、得られた実験結果をどのように解釈し、次の実験計画を立てて研究活動を進めていくかを主眼に置いて、教育課程を編成する。 2. 教育内容・方法 「特論科目」では、講義又は演習形式により授業を行う。5つの専門分野に関する高度な専門的知識を修得させることにより、自身の研究テーマをより主体的に遂行できる授業形態とする。少人数教育の特徴を活かし、教員と学生とのコミュニケーションが密な授業を行うことで、学生の研究活動をサポートする。「演習・実験科目」「論文指導科目」では、修士論文作成及び口頭による研究発表を行うことを目標に、実験結果を考慮しながら効率的に研究を進めるための指導を行う。 3. 学修成果への評価 シラバスで提示された学修(到達)目標の達成度を課題等により評価する。修士論文においては、中間発表での研究結果及び研究に取り組む姿勢を評価する。最終的には、主査や副査を中心に論文内容を審査し、修士論文審査会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。
②博士後期課程 1. 教育課程編成の考え方 化学専攻では、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。「研究科目」では、各自の研究分野における最新の研究動向及び研究成果を把握し、研究遂行に役立てる。「論文指導科目」では、独創性、先進性に優れた博士論文研究の遂行を目標とし、その遂行に不可欠な研究能力を身に付けさせる。実験を通した研究が主な活動内容となり、研究成果発表に対する批判にも耐えうる知識と考察力を修得させる。 2. 教育内容・方法 博士後期課程では、日々の研究活動を通した研究指導、論文作成指導が主な指導内容となる。各分野における研究雑誌において、査読付き論文の受理が学位取得要件に含まれている。従って、論文作成以外にも審査意見に対するコメントに的確に回答する必要がある。通常、英語の質疑応答となり、相応の語学力が要求されるため、この点に関しても指導を行う。 3. 学修成果への評価 博士論文の審査及び公聴会における審査委員、参加者との質疑応答の適切さを評価の対象とする。又、査読付き論文も評価の対象とする。
(3)機械工学専攻 ①博士前期課程 1. 教育課程編成の考え方 機械工学専攻は、専門分野を「デザイン・加工分野」「エネルギー・環境分野」「システム・制御分野」の3分野に分け、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。更に「研究科目」を、3つの専門分野に数理工学分野を加えた「特論科目」「演習・実験科目」に区分する。「特論科目」では、各専門分野に共通して必要な数学的知識とスキルを養うために専門科目と数理工学分野の科目を配置する。「演習・実験科目」では、各専門分野の高度な研究手法・応用技術を修得させ、問題解決力や独創力を培う。「論文指導科目」では、演習形式によって授業を行う。研究で得られた成果をまとめ、専門分野の学会等で発表し、修士論文にまとめる能力を育成する。 2. 教育内容・方法 「特論科目」では、機械工学の基礎となる4力学(材料力学・熱力学・流体力学・機械力学)及び各専門分野の基礎知識を修得させるための指導を行う。「演習・実験科目」では、各専門分野の特論で得られた知識を基礎として、より実践的で高度な研究を実施するための実験及び解析手法等を指導し、修士研究を遂行するための応用力を高める。「論文指導科目」では、修士研究で得られた成果を、各専門分野の学会発表(講演論文)や修士論文にまとめるための演習を行う。 3. 学修成果への評価 専攻科目については、シラバスに記載された学修(到達)目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、修士論文については、1年生で専攻内において中間発表会を行い、修士研究の進捗状況の評価を行うと共に、今後の学修成果向上のための指導を行う。又、2年生で修士論文をまとめ、専攻内で修士論文発表会を行うことで、主査や副査を中心に修士研究の成果について評価を行う。
②博士後期課程 1. 教育課程編成の考え方 独創的で先進的な研究を自立して遂行する能力を身に付け、グローバルに高く評価される研究開発を実施できる高度な専門的職業人及び研究者を育成するために、専門分野を「デザイン・加工分野」「エネルギー・環境分野」「システム・制御分野」の3分野に分け、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、博士前期課程よりも更に高度な教育課程を編成する。「研究科目」では、機械工学で必須の4力学(材料力学・熱力学・流体力学・機械力学)について、先進研究開発に結び付く高度な専攻科目の「特別講義」を1年生に配置する。「論文指導科目」では、「機械工学特別研究」を各学年に配置し、各専門分野のより高度な研究手法・応用技術を修得させる。 2. 教育内容・方法 成果公表に関する教育を実施し、各専門分野の学会における研究発表や査読付学術雑誌への論文執筆・投稿能力を向上させ、グローバルに活躍できる自立した高度な専門的職業人・研究者を育成する。「研究科目」では、各専門分野の最先端の研究に関する高度な知識を修得させるための指導を行う。「論文指導科目」では、博士研究で得られた成果を各専門分野の学会や査読付きの学術論文等で発表し、最終的にそれらを博士論文にまとめるための演習を行う。 3. 学修成果への評価 専攻科目については、シラバスに記載された学修(到達)目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、博士研究については、年1回、専攻内中間発表会を実施し、博士研究の進捗状況の評価を行うと共に、今後の学修成果向上のための指導を行う。又、3年生の終わりに、博士論文をまとめ、専攻内で博士論文審査会を実施すると共に、博士論文の公開発表を行い、主査や副査を中心に博士研究の成果について評価を行う。

(4)電気工学専攻

①博士前期課程

1. 教育課程編成の考え方

電気工学における「電力・制御分野」「情報・通信分野」「物性・デバイス分野」の主要3分野に対して、幅広く高度な専門的知識と研究遂行に必要な資料収集・分析及び研究成果の発信能力、又、電気工学技術者として必要な最先端の研究並びに技術動向に関する専門的知識と技能を修得させるため、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。「研究科目」では、研究テーマに関する高度な専門知識・技術を修得させると共に、周辺分野の知識・技術を学び、実務に関わる理解力を養う。又、電気工学に関する専門的知識及び研究成果の発信能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。「論文指導科目」では、自らの研究課題の意義を理論的・社会的に適切に位置付け、独創性あふれる研究を遂行し、修士論文作成へと発展的な学修が可能となる科目を配置する。又、学会等での発表技能を身に付けさせることを目的とした科目を併せて配置する。

2. 教育内容・方法

「研究科目」では、講義又は演習形式により授業を行う。電気工学の各分野に関する高度な専門的知識及び関連する周辺技術の研究法に基づき、実証的な研究能力を修得させると共に、各分野の研究課題について学生が主体的・能動的に検討する教育方法も積極的に取り入れる。「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。学術的・社会的意義のある実証的な研究の遂行、修士論文を作成するための研究指導を行う。

3. 学修成果への評価

シラバスで提示された科目の学修(到達)目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、修士論文については、主査や副査を中心に論文内容の精査を行うと共に、修士論文審査会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。

②博士後期課程

1. 教育課程編成の考え方

電気工学における高度な研究遂行能力と、研究成果を電気工学関連の学会あるいは社会に還元し、電気工学の学問的発展並びに新しい社会の創造・成長を牽引することのできる俯瞰力と独創性を身に付けさせるため、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。「研究科目」では、「電力・制御分野」「情報・通信分野」「物性・デバイス分野」の各分野における高度な専門的知識を修得させるための科目を配置する。「論文指導科目」では、独創性、先進性、発展性に優れ、学術的かつ社会的意義を持つ博士論文研究を実施するために、不可欠かつ高度な研究遂行能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。

2. 教育内容・方法

「研究科目」では、主として講義形式ではあるものの、演習形式に近い形態で授業を行う。本科目では、教員と学生が異なる専門性をもつ研究者同士という対等な立場に立った上で、「電力・制御分野」「情報・通信分野」「物性・デバイス分野」の各課題について互いに議論を交わすことにより、当該分野に関する先進的かつ高度な専門的知識を修得させる。「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。博士論文の執筆や、自立した研究者として電気工学関連学会あるいは社会に貢献できる研究を実施するために不可欠かつ高度な研究遂行能力を修得させるための研究指導を行う。

3. 学修成果への評価

シラバスで提示された科目の学修(到達)目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、博士論文については、博士の学位申請資格について電気工学専攻の基準を基に予備審査を行った上、提出された学位請求論文の内容の妥当性や学術的・社会的意義について主査と2名以上の副査により審査する。併せて、公聴会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。

(5)環境システム学専攻

①博士前期課程

1. 教育課程編成の考え方

環境システム学専攻は、「環境情報系」と「環境技術系」の2つの専門領域を設け、専攻科目を「研究科目」と「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。更に「研究科目」を「共通科目」「基盤科目」「専門科目」(環境情報系、環境技術系)に区分する。「共通科目」では、各専門領域に共通する基礎知識・技術を修得させる。「基盤科目」では、各専門領域の専門基礎知識・技術を修得させる。「専門科目」では、各専門領域の高度な専門知識と技術を修得させる。「論文指導科目」では、論文指導を通じて、環境問題の解決に応用・展開する実践力・実行力を養う。

2. 教育内容・方法

「研究科目」では、講義又は演習・実験形式により授業を行う。「論文指導科目」では、主に演習形式により授業を行い、学術的・社会的意義のある研究の遂行と修士論文作成のための実践的な研究指導を行う。

3. 学修成果への評価

シラバスで提示された科目の学修における到達目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、修士論文については、修士の学位申請資格について環境システム学専攻の基準を満たした論文を対象に、主査や副査を中心に論文内容を精査する。併せて、修士論文審査会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。

②博士後期課程

1. 教育課程編成の考え方

環境システム学専攻は、「環境情報系」と「環境技術系」の2つの専門領域を設け、専攻科目を「研究科目」と「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。更に「研究科目」を「共通科目」「専門科目」(環境情報系、環境技術系)に区分する。「共通科目」では、「総合学外実習」を通じて高度の専門知識を実務や研究に応用する実践力を高める。「専門科目」では、各専門領域の先端知識・技術の修得により研究能力を向上させる。「論文指導科目」では、論文指導を通じて、環境分野における高度の技術者及び研究者としての実践力・実行力を養う。

2. 教育内容・方法

「研究科目」では、講義又は実習形式により授業を行う。「論文指導科目」では、主に演習形式により授業を行い、博士論文の執筆や自立した研究者として研究を実施するために不可欠な、高度な研究遂行能力を修得させるための研究指導を行う。

3. 学修成果への評価

シラバスで提示された科目の学修における到達目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、博士論文については、博士の学位申請資格について環境システム学専攻の基準を満たした学位請求論文を対象に、その内容の妥当性や学術的・社会的意義について主査と2名以上の副査により審査する。併せて、公聴会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。

2. 人文学研究科	(1)国際コミュニケーション専攻 ①博士前期課程 1. 教育課程編成の考え方 国際コミュニケーション学における幅広い知識、実践的な言語運用能力、社会・文化の多様性に関する専門的知識・理解及び課題解決能力、そして確かな研究遂行能力を修得させるため、「研究科目」「論文指導科目」で構成する教育課程を提供する。 「研究科目」では、「領域横断科目」「留学生対応科目」「コミュニケーション研究領域」「言語学研究領域」「文化研究領域」「国際社会研究領域」の科目群を設け、幅広い専門領域の研究手法や修士論文作成に有機的につながる専門的知識を修得させることを目的とした科目を配置する。 「論文指導科目」では、自らの研究課題を論理的かつ体系的に考察し、学術的な研究手法を用いて修士論文の作成を可能とする科目を配置する。 2. 教育方法の考え方 「研究科目」では、講義形式により授業を行う。国際コミュニケーション学の各専門領域に関する専門的知識を修得させると共に、講義においてはグループ学習、ディスカッション、フィールド調査等のアクティブ・ラーニングを取り入れ、専門的知識の理解と定着を図る。 「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。学術的な研究手法を用いて理論的・体系的な修士論文を作成させるための研究指導を行う。 3. 評価方法の考え方 シラバスで提示された科目の学修(到達)目標を試験又は課題により評価する。修士論文に関しては、主査・副査を設置して内容を審査すると共に、公開の口頭試問を行うことによって公平な評価を行う。学会発表や学術誌論文等も、学修プロセスにおける達成度の評価対象とする。 ②博士後期課程 1. 教育課程編成の考え方 国際コミュニケーション学における高度な専門的知識・理解と専門領域における自己の研究の位置づけを的確に把握し、自立した研究者としての研究遂行能力を修得させるため、「特殊研究科目」「論文指導科目」で構成する教育課程を提供する。 「特殊研究科目」では、博士前期課程の「コミュニケーション研究領域」「言語学研究領域」「文化研究領域」「国際社会研究領域」の4つの領域をより高度専門化し、科目を配置する。 「論文指導科目」では、3年間を通じて、博士論文作成のための高度な研究遂行能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。 2. 教育方法の考え方 「特殊研究科目」では、講義形式により授業を行う。国際コミュニケーション学の各専門領域に関する高度な専門的知識を修得させると共に、ディスカッションを通じ、学生が博士課程に相応しい研究を進める上で必要な知識、課題発見能力、研究成果の発信力を修得させる。 「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。国内外における学会での口頭発表や専門学術誌への論文投稿を指導の一環として義務付け、研究成果の集大成となる博士論文作成へと導く研究指導を行う。 3. 評価方法の考え方 シラバスで提示された科目の学修(到達)目標を試験又は課題により評価する。博士論文に関しては、博士論文審査委員会を設置、外部審査委員を加えて審査すると共に、口頭試問による最終試験及び公聴会を経ることによって公平な評価を行う。学会発表や学術誌論文等も、学修プロセスにおける達成度の評価対象とする。
3. 情報学研究科	(1)情報学専攻 ①博士前期課程 1. 教育課程編成の考え方 急速に進展するグローバルな高度情報社会を支える情報技術分野において、より先進的な専門知識と技術を身に付け、それらを活用して、新しい時代の技術課題を実践的に解決できる応用能力を持った人材を養成するための教育課程を編成する。 このため、情報工学及び関連分野の専門知識を系統的に理解し、専門分野における研究能力を獲得することができるよう、専攻科目を「講義科目」と「論文指導科目」に区分して科目を設置する。 2. 教育内容・方法 「講義科目」では、専門知識を系統的に理解できるよう、講義と演習を組み合わせる。 「論文指導科目」では、修士論文執筆のための研究能力が身に付けられるよう、専門分野での輪講、演習、実験を行う。 3. 学修成果への評価 「講義科目」では、科目ごとの到達目標、評価の方法に従い評価を行う。 「論文指導科目」及び修士論文では、高度な専門知識を有し社会に貢献できるかを基準に評価を行う。 ②博士後期課程 1. 教育課程編成の考え方 急速に進展するグローバルな高度情報社会を支える情報技術分野において、より先進的な専門知識と技術を身に付け、それらを活用して、新しい時代の技術課題を主体的に発見・設定し、実践的に解決できる高度な応用能力を持った人材を養成するための教育課程を編成する。 このため、情報工学及び関連分野の先端的な専門知識を系統的に理解し、専門分野における高度な研究能力が獲得できるよう、専攻科目を「講義科目」と「論文指導科目」に区分して科目を設置する。 2. 教育内容・方法 「講義科目」では、先端的な専門知識が系統的に理解できるよう、講義と演習を組み合わせる。 「論文指導科目」では、学術論文、ひいては博士論文執筆のための高度な研究能力が身に付けられるよう、専門分野での輪講、演習、実験を行う。 3. 学修成果への評価 「講義科目」では、科目ごとの到達目標、評価の方法に従い評価を行う。 「論文指導科目」及び博士論文では、高度な研究能力を有し国際社会に貢献できるかを基準に、学外への論文発表等を勘案し評価を行う。

4. 経済学研究科	応用経済学専攻 1. 教育課程編成の考え方 応用経済学専攻は、「経済専門コース」「企業マネジメントコース」「会計・税務コース」の3つのコースを設け、専攻科目を経済学の基礎的素養を修得するための「選択必修科目」、各コースに対応した「選択科目」、及び「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。 「選択必修科目」では、経済学の基礎的知識、実証的分析手法、加えて税務スペシャリスト志望者に対しては基礎科目となる租税法の知識を修得させる。なお「選択必修科目」については、マクロ経済学、ミクロ経済学、及び計量経済学のうち必ず1科目を受講させる。 「選択科目」では、修士論文執筆に必要な各応用分野の専門的知識と実証研究の手法を修得させる。 「論文指導科目」では、自らの研究課題を論理的かつ体系的に考察し、学術的な研究手法を用いて修士論文を作成させる。 2. 教育内容・方法 「選択必修科目」「選択科目」による知識教授を主眼にした教育と「論文指導科目」による論文執筆指導を通じた個別教育を組み合わせて行う。論文指導においては、修士論文作成に向けた研究指導を行うと共に、実践的なプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を身に付けさせるための指導を行う。指導の過程では、研究ワークショップを定期的に開催し、進捗度を報告させると共に、複数の教員から意見及び指導を受ける機会を提供する。なお、「会計・税務コース」においては、税務スペシャリスト養成の観点から、税理士試験科目免除を目的とする税法論文の作成に資する応用科目を充実させ、税法研究者・実務経験者による論文指導を行う。 3. 学修成果への評価 科目の評価においては、シラバスで提示された科目の到達目標の達成度を試験又は課題等により評価する。修士論文の審査あるいは特定課題研究の最終試験においては、複数の教員からなる修士論文審査委員会によって評価を行う。評価においては、別に定める所定の水準を満たしていることが求められる。
5. 教育学研究科	(1)教育学専攻 ①博士前期課程 1. 教育課程編成の考え方 教育学専攻では、人材養成の目的を達成するため、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。また、幼・小・中・高教諭及び特別支援学校教諭の専修免許状の取得可能な教育課程を編成する。 「研究科目」では、教育思想、教育課程、教育方法、教育行財政、教育心理、保育課程、保育内容、障害児者教育、教科教育学等の各領域における研究の現状や課題、教育事象や教育実践上の現代的課題を含む、深い専門的知識を総合的に提供する科目を配置する。 「論文指導科目」では、様々な教育事象や教育実践に関し、自ら問題を発見し、既存の法則や理論を検証しつつ新たな法則や理論を帰納的に導き出し、問題の解決に向けて理論と実践の往還に寄与し得る研究を遂行し、修士論文作成への発展的な学修が可能となる科目を配置する。 2. 教育内容・方法 「研究科目」では、講義又は演習形式により授業を行う。教育学の各領域に関する高度な専門的知識・技能と、教育学各領域の研究法と倫理に基づく実証的な研究能力、並びに社会に貢献しうる高度専門職業人としての専門性や技能を修得させる。そして、各領域の研究課題について、学生に主体的・能動的に検討させる教育方法を積極的に取り入れる。 「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。倫理を踏まえ学術的・社会的意義のある実証的な研究を遂行し、修士論文を作成するための研究指導を行う。 3. 学修成果への評価 シラバスで提示された科目の学修(到達)目標の達成度を試験又は課題により評価する。また、修士学位論文については、主査と副査で構成された修士論文審査委員会が、提出された修士学位論文の審査及び最終試験を行う。併せて、修士論文審査会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。 ②博士後期課程 1. 教育課程編成の考え方 教育学専攻では、人材養成の目的を達成するため、専攻科目を「研究科目」と「論文指導科目」に区分し、体系的に教育課程を編成する。「研究科目」では、教育学の各領域における今日的・先進的な課題に関する高度な専門的知識を修得させ、諸理論を発展的・創造的に論究することを目的とした科目を配置する。 「論文指導科目」では、投稿論文の執筆に必要なアカデミックライティング法や学会等での発表技能を修得させ、独創性、先進性、発展性に優れ、学術的かつ社会的意義を持つ博士論文研究を実施するために不可欠な高度な研究遂行能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。 2. 教育内容・方法 「研究科目」では、主として講義形式ではあるものの、演習形式に近い形態で授業を行う。本科目では、教員と学生はそれぞれ独自の専門性をもつ研究者同士という対等な立場にほぼ準じた上で、教育学の各専門領域の今日的・発展的課題や最新の研究成果について互いに議論を交わすことにより、当該領域に関する学際的、先進的かつ高度な専門的知識を修得させる。 「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。博士論文の執筆や、自立した研究者として教育諸科学や社会に貢献できる研究を実施するために不可欠な、高度な研究遂行能力を修得させるための研究指導を行う。 3. 学修成果への評価 シラバスで提示された科目の学修(到達)目標の達成度を試験又は課題により評価する。また、博士論文については、博士の学位申請資格について教育学研究科教育学専攻の基準を基に中間審査を行った上、提出された学位請求論文の内容の妥当性や学術的・社会的意義について主査と2名以上の副査により構成された博士論文審査委員会が、提出された博士学位論文の審査及び最終試験を行う。併せて、公聴会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。

6. 心理学研究科	(1)心理学専攻 ①博士前期課程 1. 教育課程編成の考え方 心理学における幅広く高度な専門的知識と研究遂行に必要な資料収集・分析及び研究成果の発信能力、又、心理実践家に必要な心理臨床に関する専門的知識と技能を修得させるため、「研究科目」「実習科目」「論文指導科目」で構成する教育課程を提供する。「研究科目」では、一般・基礎心理学分野と臨床心理学分野の各領域における研究の現状や課題を含む深い専門的知識を総合的に提供する科目を配置すると共に、心理学研究法やデータ解析法に関する専門的知識及び研究成果の発信能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。「実習科目」では、心理実践家としての高い倫理観と心理臨床に関する専門的知識・技能を修得させることを目的とした科目を配置する。「論文指導科目」では、自らの研究課題の意義を理論的・社会的文脈に適切に位置付け、独創性あふれる研究を遂行し、修士論文作成へと発展的な学修が可能となる科目を配置する。 なお、博士前期課程では、公認心理師及び臨床心理士資格の受験資格を満たす教育課程を編成する。 2. 教育方法の考え方 「研究科目」では、講義又は演習形式により授業を行う。心理学の各専門領域に関する高度な専門的知識及び心理学の研究法に基づく実証的な研究能力を修得させると共に、個々の領域の研究課題について各学生が主体的・能動的に検討する教育方法も積極的に取り入れる。「実習科目」では、実習形式により授業を行う。学内での事前指導を充分に行った上で、「保健医療」「福祉」「教育」「司法・犯罪」「産業・労働」の幅広い臨床領域における心理実践の方法を、各現場の実習指導者との緊密な連携のもと体験的に修得させる。「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。学術的・社会的意義のある実証的な研究の遂行、修士論文を作成させるための研究指導を行う。 3. 評価方法の考え方 シラバスで提示された科目の学修(到達)目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、修士論文については、主査や副査を中心に論文内容の精査を行うと共に、修士論文発表会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。 ②博士後期課程 1. 教育課程編成の考え方 心理学における高度な研究遂行能力と、研究成果を心理学界や社会に還元し、心理学の学問的発展や新しい社会の創造・成長を牽引することのできる俯瞰力と独創性を身に付けさせるため、「特殊研究科目」と「論文指導科目」によって構成する教育課程を提供する。「特殊研究科目」では、一般・基礎心理学分野と臨床心理学分野の各領域における高度な専門的知識を修得させるための科目を配置する。又、投稿論文の執筆に必要なアカデミックライティング法や学会等での発表技能を身に付けさせることを目的とした科目を併せて配置する。「論文指導科目」では、独創性、先進性、発展性に優れ、学術的かつ社会的意義を持つ博士論文研究を実施するために不可欠な高度な研究遂行能力を身に付けさせることを目的とした科目を配置する。 2. 教育方法の考え方 「特殊研究科目」では、主として講義形式ではあるものの、演習形式に近い形態で授業を行う。本科目では、教員と学生が異なる専門性をもつ研究者同士という対等な立場に立った上で、心理学の各専門領域の今日的・発展的課題について互いに議論を交わすことにより、当該領域に関する先進的かつ高度な専門的知識を修得させる。「論文指導科目」では、演習形式により授業を行う。博士論文の執筆や、自立した研究者として心理学界や社会に貢献できる心理学研究を実施するために不可欠な、高度な研究遂行能力を修得させるための研究指導を行う。 3. 評価方法の考え方 シラバスで提示された科目の学修(到達)目標の達成度を試験又は課題により評価する。又、博士論文については、博士の学位申請資格について心理学研究科心理学専攻の基準を基に予備審査を行った上、提出された学位請求論文の内容の妥当性や学術的・社会的意義について主査と2人以上の副査により審査する。併せて、公聴会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。
------------------	---

7. 建築学研究科	建築学専攻 1. 教育課程編成の考え方 建築学専攻では、多種多様な機能を持つ美しい建築空間の実現、持続可能な都市や社会基盤の構築、地震をはじめとする自然災害に対する防災・減災技術の開発といった、新しい時代の技術課題を実践的に解決できる応用能力を持った人材を養成するための教育課程を編成する。実務家に必要な高度な専門的知識と、研究遂行に必要な資料収集・分析及び研究成果の発信能力を修得するため、専攻科目を「研究科目」「論文指導科目」に区分し、さらに「研究科目」を「専門・応用科目」と「演習・実験科目」に区分する。 2. 教育内容・方法 「研究科目」では、講義又は演習・実験形式により授業を行う。「専門・応用科目」では、主に講義形式により、各分野の高度な専門的知識が修得できる。「演習・実験科目」では、各分野の調査・研究方法の実践を通じ、新しい課題に対する解決策の検討を実行する科目を配置する。「論文指導科目」では、演習・実験形式により、実証的な研究能力を修得させると共に、自らの研究課題の意義を社会的文脈に適切に位置付け、独創性あふれる研究を遂行し、修士学位論文または修士設計(特定課題研究)を発展的に作成するための研究指導を行う。 3. 学修成果への評価 「研究科目」は、科目ごとに提示された到達目標、評価の方法に従い評価を行う。「論文指導科目」は、中間発表及び最終提出された成果物より評価する。社会に貢献できるかを基準に、主査・副査を中心に研究内容の精査を行い、修士研究(論文・設計)審査会における研究成果のプレゼンテーションや質疑応答の適切さについても評価の対象とする。
-----------	--

別表第4 学部・学科等の入学者受け入れ方針(アドミッション・ポリシー)

明星大学大学院は、「学位授与方針」に掲げた養成する人材像を達成するため、入学前に身につけておくべき能力等を示した「入学者受け入れ方針」を定め、学士課程で修得・養成される5つの能力・資質(以下、「5つの能力・資質」**①～⑤**)を有するかを評価基準として入学者選抜を実施する。

■明星大学大学院 入学者受け入れにおいて求める「5つの能力・資質」

- ①課題発見・解決:**実践的かつ体験的な学びを通じて知識・技能を能動的に修得して、多様な実践の場で自ら課題を発見し、それを解決することができる能力・資質。
- ②思考・判断:**国際化に対応する幅広い視野と多様性を受け入れる創造的思考力及び判断力を修得して、地域社会の発展に寄与しながら、国際社会の発展にも貢献することができる能力・資質。
- ③関心・意欲・態度:**学生同士並びに教職員との人格接触を伴う学修を通じ、自己を律するとともに自己を確立し、自らの目標を明確に定め、社会に貢献することができる能力・資質。
- ④知識・理解・表現:**多様な価値観を受け入れることができる自立した市民に相応しい幅広い教養を修め、社会的倫理に従って自己を律しながら、多様なコミュニケーションの方法を用いて、修得した教養を社会のために役立てられる能力・資質。
- ⑤技術・技能:**国内外の社会に専門的技術・技能を以て貢献しうる証として種々の資格を取得している。あるいは、資格化されていないが社会に貢献しうる技術・技能を、又はそのような技術・技能の基礎を成す資質を修得している能力・資質。

1. 理工学研究科	(1)物理学専攻 ①博士前期課程 ・AP1:自然科学における実証性、論証性という方法論を理解し、特に宇宙物理学・天文学、物性物理学、原子核・素粒子物理学のいずれかの分野における興味と基礎知識をもっている。 ・AP2:宇宙物理学・天文学、物性物理学、原子核・素粒子物理学のいずれかにおいて、テーマをみつけ、物理的手法によりその理解と、問題解決に努力をする意欲をもっている。 ・AP3:理学・工学の分野を横断的に見渡し、専門知識を他分野にも応用することに意欲がある。 ・AP4:物理学以外の活動で起こっている事象の中からでも、理論や、実験による物理学手法による解決に関心・意欲をもっている。 ・AP5:テーマの中で得た理論や実験の結果を整理し、物理学に関する、発表・議論に積極的に臨むことに意欲をもっている。 ・AP6:自ら率先して、研究室内の運営に携わること、良い人間関係を築くことに意欲をもっている。 ・AP7:現場で発生する問題・課題に対して、根源に立ち戻ってその解決方法を探ることに意欲をもっている。 1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準 学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科物理学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。 書類選考により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,2,3,4,5,6,7)に示す能力・資質を評価します。 2. 一般入学試験における評価方法と評価基準 一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科物理学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。 研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,2,3,4,5,6)に示す能力・資質を評価します。 面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,7)に示す能力・資質を評価します。 筆記試験(英語・専門科目)により、「5つの能力・資質」のうち「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー(AP1)に示す能力・資質を評価します。 3. 再入学試験における評価方法と評価基準 再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、理工学研究科物理学専攻で学修及び研究を進めていくために能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。 口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて(「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」)を基準として、すべてのアドミッションポリシー(AP1,2,3,4,5,6,7)に示す能力・資質を評価します。
-----------	---

②博士後期課程

- ・AP1: 自然科学における実証性、論証性という方法論を理解し、自然科学、特に宇宙物理学・天文学、物性物理学、原子核・素粒子物理学のいずれかの分野における修士課程修了程度の知識を持っている。
- ・AP2: 理学・工学の考え方や原理に基づき、問題を解決することに意欲を持っている。
- ・AP3: 現実の社会で発生している物理学以外の問題・事象に対しても、各専門分野で経験した研究手法を適用することに意欲を持っている。
- ・AP4: より高度な物理学を学び、物理学以外の活動で起こっている事象の中で、物理学の手法で解決できるものがあるならば、その解決策を提示することに意欲を持っている。
- ・AP5: 宇宙物理学・天文学、物性物理学、原子核・素粒子物理学のいずれかの分野の中で理論や実験の高度な結果を得ること、専門分野において投稿、発表することに意欲を持っている。
- ・AP6: 新たな研究テーマを自ら考え提案・研究して、未知の問題に解決策を与えられる専門的職業人となることに意欲を持っている。
- ・AP7: 研究などにおいて理論を提案するだけでなく、実際にやって検証すること、または検証するための技術を身につけることに意欲を持っている。

1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準

学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科物理学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。
書類選考により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー (AP1,2,3,4,5,6,7) に示す能力・資質を評価します。

2. 一般入学試験における評価方法と評価基準

一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科物理学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。
研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー (AP1,2,3,4,5,6) に示す能力・資質を評価します。
面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー (AP1,7) に示す能力・資質を評価します。
筆記試験 (英語・専門科目) により、「5つの能力・資質」のうち「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー (AP1) に示す能力・資質を評価します。

3. 再入学試験における評価方法と評価基準

再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、理工学研究科物理学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。
口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて (「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」) を基準として、すべてのアドミッションポリシー (AP1,2,3,4,5,6,7) に示す能力・資質を評価します。

(2) 化学専攻

①博士前期課程

- ・AP1: 文献調査のための英文読解能力、実験から多くを学ぶ観察能力を有している人。
- ・AP2: 文献・書籍からの知識、自身の知見、将来の展望との区別が明確な思考法と判断能力を有している人。
- ・AP3: 化学研究の実施に高いモチベーションを有している人。
- ・AP4: 不明・不確実なことを自ら調べる姿勢を有している人。
- ・AP5: 考えながら実験を進めていく姿勢を有している人。

1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準

学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科化学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。
書類選考により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー (AP1,2,3,4,5) に示す能力・資質を評価します。

2. 一般入学試験における評価方法と評価基準

一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科化学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。
研究計画書、筆記試験(英語・専門科目)により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,2)に示す能力・資質を評価します。
面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー(AP3,4,5)に示す能力・資質を評価します。

3. 再入学試験における評価方法と評価基準

再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、理工学研究科化学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。
口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて(「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」)を基準として、すべてのアドミッションポリシー(AP1,2,3,4,5)に示す能力・資質を評価します。

②博士後期課程

- ・AP1: 専門分野の研究動向を把握し、自らの研究の位置付けをして、将来の展望を有している人。
- ・AP2: 研究手法の高度化を工夫する思考法を備え、結果の解析の精度を確実に判断する能力を有している人。
- ・AP3: 専門分野に関わる関連分野の発展にも関心を広げ、現実性のある将来の展望を有している人。
- ・AP4: 自身の研究に責任ある姿勢を持つことができる人。
- ・AP5: 研究手法の工夫を継続して進めていく姿勢と能力を持っている人。自らの研究を専門家にも、また社会にも説明できる能力を有している人。

1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準

学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科化学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。
書類選考により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,2,3,4,5)に示す能力・資質を評価します。

2. 一般入学試験における評価方法と評価基準

一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科化学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。
研究計画書、筆記試験(小論文)により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,2)に示す能力・資質を評価します。
面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー(AP3,4,5)に示す能力・資質を評価します。

3. 再入学試験における評価方法と評価基準

再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、理工学研究科化学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。
口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて(「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」)を基準として、すべてのアドミッションポリシー(AP1,2,3,4,5)に示す能力・資質を評価します。

(3) 機械工学専攻

①博士前期課程

- ・AP1: 材料力学、機械力学、流体力学、熱力学の基礎を理解し、各力学の実験、結論を導き出すことができる。
- ・AP2: プロジェクト科目、卒業研究を通して指導教員とともに自らのテーマの内容を把握し、専門用語等の説明できる能力が身に付いている。
- ・AP3: 関連分野の文献検索ができる。関連学会を積極的に参加する意欲を有している。
- ・AP4: 研究室での研究等の運営を協調性を持ってできる。
- ・AP5: 自らの研究についてのまとめる能力(文章力、プレゼンテーション)が身に付いている。

1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準

学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科機械工学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。
書類選考により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。

2. 一般入学試験における評価方法と評価基準

一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科機械工学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。
筆記試験（英語・専門科目）により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」を基準として、アドミッションポリシー（AP1）に示す能力・資質を評価します。
研究計画書および面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。

3. 再入学試験における評価方法と評価基準

再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、理工学研究科機械工学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。
口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて（「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」）を基準として、すべてのアドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。

②博士後期課程

- ・AP1:材料力学、機械力学、流体力学、熱力学を体系的に理解し、関連した分野の実験方法を理解している。
- ・AP2: 具体的かつ詳細な研究計画を立案し、当該研究計画に基づき実験及び解析をやり遂げることができる。
- ・AP3: ディスカッションを通じて、研究手法、実験手法、解析手法に創意工夫を加えることができる。
- ・AP4: 指導教員等と円滑なコミュニケーションを図りながら、リーダーシップをもってチームの研究に貢献することができる。
- ・AP5: 科学技術の発展と多様化に対応できる論理的思考力と文章力、プレゼンテーション能力を有している。

1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準

学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科機械工学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。
書類選考により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。

2. 一般入学試験における評価方法と評価基準

一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科機械工学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。
研究計画書および面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。

3. 再入学試験における評価方法と評価基準

再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、理工学研究科機械工学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。
口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて（「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」）を基準として、すべてのアドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。

(4)電気工学専攻

①博士前期課程

- ・AP1:電磁気や回路等に関する基本的知識と理解力を有する人。
- ・AP2:電気工学の体系を身につけ、応用力を持とうとする人。
- ・AP3:電気工学専攻が掲げる目的を理解し、それを遂行する意欲がある人。
- ・AP4:自ら学ぼうとし、発信しようとする人。

1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準

学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科電気工学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。
書類選考により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー (AP1,2,3,4) に示す能力・資質を評価します。

2. 一般入学試験における評価方法と評価基準

一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科電気工学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。
研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー (AP1,2,3,4) に示す能力・資質を評価します。
筆記試験(専門科目)により、「5つの能力・資質」のうち「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー (AP1) に示す能力・資質を評価します。
面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー (AP2,4) に示す能力・資質を評価します。

3. 再入学試験における評価方法と評価基準

再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、理工学研究科電気工学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。
口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて(「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」)を基準として、すべてのアドミッションポリシー (AP1,2,3,4) に示す能力・資質を評価します。

②博士後期課程

- ・AP1:前期課程の研究概要又はそれに相当することについて、説明することができる人。
- ・AP2:電気工学の体系を身につけ、応用力を持とうとする人。
- ・AP3:電気工学専攻が掲げる目的を理解し、それを遂行する意欲がある人。
- ・AP4:自ら学ぼうとし、発信しようとする人。

1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準

学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科電気工学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。
書類選考により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー (AP1,2,3,4) に示す能力・資質を評価します。

2. 一般入学試験における評価方法と評価基準

一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科電気工学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。
研究計画書・修士論文要旨により、「5つの能力・資質」のうち「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー (AP1,2,3,4) に示す能力・資質を評価します。
筆記試験(専門科目)により、「5つの能力・資質」のうち「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー (AP1) に示す能力・資質を評価します。
面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー (AP2,4) に示す能力・資質を評価します。

3. 再入学試験における評価方法と評価基準

再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、理工学研究科電気工学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。

口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて(「**①課題発見・解決**」「**②思考・判断**」「**③関心・意欲・態度**」「**④知識・理解・表現**」「**⑤技術・技能**」)を基準として、すべてのアドミッションポリシー(AP1,2,3,4)に示す能力・資質を評価します。

(5)環境システム学専攻

①博士前期課程

- ・AP1:環境技術者又は研究者を目指す人。
 - ・AP2:アジア地域の環境保全に関心を持つ人。
 - ・AP3:環境問題に関心を持ち、それを解決する意欲のある人。
 - ・AP4:自主的・継続的に勉学・研究を実行できる人。
 - ・AP5:環境全般の基礎的知識を持ち、実験・調査に取り組める人。
- (大学卒業レベルの英語力のある人)

1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準

学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科環境システム学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。

書類選考により、「5つの能力・資質」のうち「**①課題発見・解決**」「**②思考・判断**」「**③関心・意欲・態度**」「**④知識・理解・表現**」「**⑤技術・技能**」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,2,3,4,5)に示す能力・資質を評価します。

2. 一般入学試験における評価方法と評価基準

一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科環境システム学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。

研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「**①課題発見・解決**」「**②思考・判断**」「**④知識・理解・表現**」「**⑤技術・技能**」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,2,3,4,5)に示す能力・資質を評価します。

筆記試験(英語・専門科目)により、「5つの能力・資質」のうち「**④知識・理解・表現**」「**⑤技術・技能**」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,5)に示す能力・資質を評価します。

面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「**②思考・判断**」「**③関心・意欲・態度**」「**④知識・理解・表現**」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,2,4,5)に示す能力・資質を評価します。

3. 再入学試験における評価方法と評価基準

再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、理工学研究科環境システム学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。

口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて(「**①課題発見・解決**」「**②思考・判断**」「**③関心・意欲・態度**」「**④知識・理解・表現**」「**⑤技術・技能**」)を基準として、すべてのアドミッションポリシー(AP1,2,3,4,5)に示す能力・資質を評価します。

②博士後期課程

- ・AP1:高度なレベルの環境技術者又は研究者を目指す人。
- ・AP2:研究に対して計画から実験・調査および分析を行うことができる人。
- ・AP3:環境問題に関心を持ち、それを解決する意欲のある人。
- ・AP4:自主的にかつチームワークで研究ができる人。
- ・AP5:研究論文等を読みこなすレベルの英語力のある人。

1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準

学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科環境システム学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。

書類選考により、「5つの能力・資質」のうち「**①課題発見・解決**」「**②思考・判断**」「**③関心・意欲・態度**」「**④知識・理解・表現**」「**⑤技術・技能**」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,2,3,4,5)に示す能力・資質を評価します。

	2. 一般入学試験における評価方法と評価基準 一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した理工学研究科環境システム学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,3,5）に示す能力・資質を評価します。 面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,4）に示す能力・資質を評価します。 3. 再入学試験における評価方法と評価基準 再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、理工学研究科環境システム学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。 口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて（「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」）を基準として、すべてのアドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。
2. 人文学研究科	(1) 国際コミュニケーション専攻 ① 博士前期課程 ・AP1: 本専攻に入学する学生は、英語か中国語（留学生は英語か日本語）による基礎的な文書作成・読解ができる。 ・AP2: 専門的な指導のもとに、研究課題を設定・遂行できる。 ・AP3: 専門的な指導のもとに、研究課題の適切な調査・分析ができる。 ・AP4: 異文化に対する深い関心を養うことができる。 ・AP5: 他者とのコミュニケーションを通して学問的な交流ができる。 1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準 学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した人文学研究科国際コミュニケーション専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3）に示す能力・資質を評価します。 面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,4,5）に示す能力・資質を評価します。 2. 一般入学試験における評価方法と評価基準 一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した人文学研究科国際コミュニケーション専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3）に示す能力・資質を評価します。 面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,4,5）に示す能力・資質を評価します。 3. 海外学術交流 提携校卒業生対象（特別推薦）における評価方法と評価基準 海外学術交流提携校卒業生対象（特別推薦）では、アドミッションポリシーに示した人文学研究科国際コミュニケーション専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。 書類選考により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3）に示す能力・資質を評価します。 4. 海外学術交流 提携校卒業生対象（特別選抜）における評価方法と評価基準 海外学術交流提携校卒業生対象（特別選抜）では、アドミッションポリシーに示した人文学研究科国際コミュニケーション専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。 書類選考により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3）に示す能力・資質を評価します。 面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP4,5）に示す能力・資質を評価します。

	5. 再入学試験における評価方法と評価基準 再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、人文学研究科国際コミュニケーション専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。 口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて(「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」)を基準として、すべてのアドミッションポリシー(AP1,2,3,4,5)に示す能力・資質を評価します。 ②博士後期課程 ・AP1:本専攻に入学する学生は、英語か中国語(留学生は英語か日本語)による基礎的な文書作成・読解ができる。 ・AP2:独自の研究課題を設定・遂行できる。 ・AP3:独自の研究課題を適切に調査・分析ができる。 ・AP4:課題解決に必要な知識・情報を収集・分析できる。 ・AP5:他者とのコミュニケーションを通して学問的交流ができる。 1. 一般入学試験における評価方法と評価基準 一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した人文学研究科国際コミュニケーション専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。 研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,2,3)に示す能力・資質を評価します。 面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,4,5)に示す能力・資質を評価します。 2. 再入学試験における評価方法と評価基準 再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、人文学研究科国際コミュニケーション専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。 口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて(「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」)を基準として、すべてのアドミッションポリシー(AP1,2,3,4,5)に示す能力・資質を評価します。
3. 情報学研究科	(1)情報学専攻 ①博士前期課程 ・AP1:コンピュータのハードウェアとソフトウェア、及び数学の基礎的知識が身についている。 ・AP2:ネットワーク、アプリケーションプログラミング、情報処理に関する基礎的知識が身についている。 ・AP3:コンピュータに関わる工学的な課題を把握し、論理的に理解することができる。 ・AP4:技術者としての倫理観と専門知識を有し、社会に対する責務を負うことができる。 ・AP5:各分野で利用されているプログラミング言語を用いて、実用的なプログラミングができる。 ・AP6:自然科学、社会科学、人文科学等の分野において、情報処理技術を幅広く活用することができる。 ・AP7:様々な課題に対して論理的な思考を簡単な文章で表現することができる。 ・AP8:自律的に学習し、日常生活をしていく上で必要な表現力、コミュニケーション力などの基本的な技能が身についている。 ・AP9:最新の情報知識、技術知識の概要を理解し、その応用方法を簡単な文章で表現することができる。 1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準 学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した情報学研究科情報学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。 研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー(AP3,4,6,7,9)に示す能力・資質を評価します。 面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,2,3,4,5,6,7,8,9)に示す能力・資質を評価します。

2. 一般入学試験における評価方法と評価基準

一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した情報学研究科情報学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。

研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー（AP3,4,6,7,9）に示す能力・資質を評価します。

面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5,6,7,8,9）に示す能力・資質を評価します。

3. 再入学試験における評価方法と評価基準

再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、情報学研究科情報学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。

口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて（「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」）を基準として、すべてのアドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5,6,7,8,9）に示す能力・資質を評価します。

②博士後期課程

- ・AP1:コンピュータのハードウェアとソフトウェア、及び数学の応用的知識が身についている。
- ・AP2:ネットワーク、アプリケーションプログラミング、情報処理に関する応用的知識が身についている。
- ・AP3:コンピュータに関わる工学的な課題を論理的に理解し、的確に判断することができる。
- ・AP4:技術者としての倫理観と専門知識を有し、社会に対する責務を理解している。
- ・AP5:各分野で利用されているプログラミング言語を用いて、実用的なプログラミングができる。
- ・AP6:自然科学、社会科学、人文科学等の分野において、情報処理技術を幅広く活用することができる。
- ・AP7:様々な課題に対して論理的な思考を簡単な文章で表現することができる。
- ・AP8:研究成果を発信するために必要な論文作成能力及びプレゼンテーション能力を有している。
- ・AP9:最新の情報知識、技術知識の概要を理解し、その応用方法を説明できる。

1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準

学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した情報学研究科情報学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。

研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー（AP3,4,6,7,9）に示す能力・資質を評価します。

面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5,6,7,8,9）に示す能力・資質を評価します。

2. 一般入学試験における評価方法と評価基準

一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した情報学研究科情報学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。

研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー（AP3,4,6,7,9）に示す能力・資質を評価します。

面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5,6,7,8,9）に示す能力・資質を評価します。

3. 再入学試験における評価方法と評価基準

再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、情報学研究科情報学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。

口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて（「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」）を基準として、すべてのアドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5,6,7,8,9）に示す能力・資質を評価します。

4. 経済学研究科	(1)応用経済学専攻 ①修士課程 ・AP1:金融・経済や財務・会計に関する基礎的知識を有する人。 ・AP2:経済学や商学に立脚した自らの研究テーマを設定することができる人。 ・AP3:自らの考えを論理的かつ的確に表現し、他者に伝えることができるコミュニケーション能力を有する人。 ・AP4:グローバル化する社会や多様化する組織の中で、大学院での研究を活かし、高度職業人となる等積極的に社会貢献を行う意欲を有する人。 1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準 学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した経済学研究科応用経済学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。 大学院進学計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2）に示す能力・資質を評価します。 面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー（AP3,4）に示す能力・資質を評価します。 2. 一般入学試験における評価方法と評価基準 一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した経済学研究科応用経済学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。 大学院進学計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2）に示す能力・資質を評価します。 面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー（AP3,4）に示す能力・資質を評価します。 3. 再入学試験における評価方法と評価基準 再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、経済学研究科応用経済学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下の方法と基準で評価します。 口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて（「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」）を基準として、すべてのアドミッションポリシー（AP1,2,3,4）に示す能力・資質を評価します。
5. 教育学研究科	(1)教育学専攻 ①博士前期課程 ・AP1:学部教育で培った能力を発展させ、学校教育の課題の解決に意欲のある人。 ・AP2:教科・教科教育や発達・学習に関する諸問題を論理的に考察しようとする人。 ・AP3:教育経験を省察し、さらに高度な専門的能力、資質を探究しようとする人。 ・AP4:子どもの理解や、授業実践力をより高める意欲のある人。 ・AP5:教育・保育現場における課題意識を持っている人。 1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準 学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した教育学研究科教育学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。 研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。 面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,4,5）に示す能力・資質を評価します。 2. 一般入学試験における評価方法と評価基準 一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した教育学研究科教育学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。 研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。 面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。 筆記試験（英語・専門科目）により、「5つの能力・資質」のうち「②思考・判断」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー（AP2,3）に示す能力・資質を評価します。

	3. 再入学試験における評価方法と評価基準 再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、教育学研究科教育学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。 口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて(「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」)を基準として、すべてのアドミッションポリシー(AP1,2,3,4,5)に示す能力・資質を評価します。 ②博士後期課程 ・AP1:教育学に関して、高度な専門的知識を持ち、創造性豊かな優れた研究能力を持つ研究者を目指す人。 ・AP2:教育学に関して、確かな教育能力と研究能力を兼ね備えた教育者を目指す人。 ・AP3:生涯学習として教育学を研究し、その知識や能力を知識基盤社会で役立てたいと考える人。 1. 一般入学試験における評価方法と評価基準 一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した教育学研究科教育学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。 研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,2,3)に示す能力・資質を評価します。 面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,2,3)に示す能力・資質を評価します。 筆記試験(英語・専門科目)により、「5つの能力・資質」のうち「②思考・判断」「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,2)に示す能力・資質を評価します。 2. 再入学試験における評価方法と評価基準 再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、教育学研究科教育学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。 口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて(「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」)を基準として、すべてのアドミッションポリシー(AP1,2,3)に示す能力・資質を評価します。
6. 心理学研究科	(1)心理学専攻 ①博士前期課程 ・AP1:心理学の諸領域に関する幅広い基礎知識を有し、適切なデータ収集及び解析方法を理解できる人。 ・AP2:国内外の学術論文を読み、その内容を把握できる人。 ・AP3:人間の基本的な行動メカニズムや現代社会が抱える諸問題に関心を持ち、心理学の専門的立場から、それらの問題解決に向けた研究を行える人。 ・AP4:研究者あるいは実践家として、学術や社会の発展に貢献できる人。 ・AP5:実証的・科学的な心理学研究を遂行するために必要な一連の研究技法を身に付け、得られた知見を学術論文としてまとめ、的確に発信できる人。 1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準 学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した心理学研究科心理学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。 書類選考により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー(AP1,2,3,4,5)に示す能力・資質を評価します。

2. 一般入学試験における評価方法と評価基準

一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した心理学研究科心理学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。

研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。

筆記試験（英語・専門科目）により、「5つの能力・資質」のうち「②思考・判断」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,5）に示す能力・資質を評価します。

面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。

3. 公募制推薦入学試験における評価方法と評価基準

公募制推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した心理学研究科心理学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。

研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。

面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。

筆記試験（英語）により、「5つの能力・資質」のうち「②思考・判断」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,5）に示す能力・資質を評価します。

4. 再入学試験における評価方法と評価基準

再入学試験は、APを満した上で一度入学した者が対象ではあるが、心理学研究科心理学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。

口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて（「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」）を基準として、すべてのアドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。

②博士後期課程

・AP1: 心理学の諸領域に関する専門知識を有し、各領域における近年の研究動向について理解できる人。

・AP2: 国内外の学術論文の内容を理解し、研究の潮流を見定め、その中に自らの研究課題を位置づけられる人。

・AP3: 人間の基本的な行動メカニズムや現代社会が抱える諸問題に深い関心を持ち、心理学の専門的立場から、それらの問題解決に向けた研究を行い続けることができる人。

・AP4: 研究者として、研究成果を学界ならびに社会に還元し、学術や社会の発展に貢献できる人。

・AP5: 実証的・科学的な心理学研究を遂行するために必要な一連の研究技法を身に付け、得られた知見を学術論文としてまとめ、的確に発信できる人。

1. 学内推薦入学試験における評価方法と評価基準

学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した心理学研究科心理学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。

研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。

面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。

	2. 一般入学試験における評価方法と評価基準 一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した心理学研究科心理学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。 研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。 筆記試験（英語・専門科目）により、「5つの能力・資質」のうち「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,5）に示す能力・資質を評価します。 面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。 3. 再入学試験における評価方法と評価基準 再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、心理学研究科心理学専攻博士後期課程で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。 口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて（「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」）を基準として、すべてのアドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。
7. 建築学研究科	(1)建築学専攻 ①修士課程 ・AP1: 建築学に関する学士課程の基礎学力を有している人。 ・AP2: 技術者としての社会的責務を常に考え、適切な判断により行動できる人。 ・AP3: 社会的問題に関心を持ち、フィールド調査や実験を通して研究し、問題を解決する意欲を有する人。 ・AP4: 設計や研究の正しい方向を見定め、具体的な計画を立案し、主体的かつ能動的に行動できる人。 ・AP5: 自らが専門とする建築学分野に関する知見を、正しく、的確に表現できる人。 1. 学内推薦入学試験 における評価方法と評価基準 学内推薦入学試験では、アドミッションポリシーに示した建築学研究科建築学専攻で研究または設計を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。 書類選考により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。 2. 一般入学試験 における評価方法と評価基準 一般入学試験では、アドミッションポリシーに示した建築学研究科建築学専攻で研究または設計を進めていくために必要な能力・資質について、以下のような方法と基準で評価します。 研究計画書により、「5つの能力・資質」のうち「①課題発見・解決」「③関心・意欲・態度」を基準として、アドミッションポリシー（AP3,4）に示す能力・資質を評価します。 筆記試験（専門科目）により、「5つの能力・資質」のうち「④知識・理解・表現」を基準として、アドミッションポリシー（AP1）に示す能力・資質を評価します。 面接試験により、「5つの能力・資質」のうち「②思考・判断」「⑤技術・技能」を基準として、アドミッションポリシー（AP2,5）に示す能力・資質を評価します。 3. 再入学試験 における評価方法と評価基準 再入学試験は、APを満たした上で一度入学した者が対象ではあるが、建築学研究科建築学専攻で学修及び研究を進めていくために必要な能力・資質を再確認するため、以下のような方法と基準で評価します。 口頭試問での研究計画書の内容確認や質疑応答により、「5つの能力・資質」すべて（「①課題発見・解決」「②思考・判断」「③関心・意欲・態度」「④知識・理解・表現」「⑤技術・技能」）を基準として、すべてのアドミッションポリシー（AP1,2,3,4,5）に示す能力・資質を評価します。

別表第5－1 学位授与の要件 理工学研究科

(1) 物理学専攻

①博士前期課程

科目区分		修了に必要な単位数		備考
専攻科目	研究科目			30単位 ※1 ※2 ※3
	選択科目	22単位		
	論文指導科目			
	必修科目	8単位		

(備考)

※1 本大学院修士課程に2年以上在学

※2 修了に必要な単位数：30単位以上（必修：8単位、選択：22単位以上）

※3 論文指導を受けた上、修士学位論文審査および最終試験に合格

②博士後期課程

科目区分		修了に必要な単位数		備考
専攻科目	研究科目			20単位 ※1 ※2 ※3
	選択科目	8単位		
	論文指導科目			
	必修科目	12単位		

(備考)

※1 本大学院博士課程に3年以上在学

※2 修了に必要な単位数：20単位以上（必修：12単位、選択：8単位以上）

※3 論文指導を受けた上、博士学位論文審査および最終試験に合格

(2) 化学専攻

①博士前期課程

科目区分		修了に必要な単位数		備考
専攻科目	研究科目			30単位 ※1 ※2 ※3
	選択科目	22単位		
	論文指導科目			
	必修科目	8単位		

(備考)

※1 本大学院修士課程に2年以上在学

※2 修了に必要な単位数：30単位以上（必修：8単位、選択：22単位以上）

※3 論文指導を受けた上、修士学位論文審査および最終試験に合格

②博士後期課程

科目区分		修了に必要な単位数		備考
専攻科目	研究科目			20単位 ※1 ※2 ※3
	選択科目	8単位		
	論文指導科目			
	必修科目	12単位		

(備考)

※1 本大学院博士課程に3年以上在学

※2 修了に必要な単位数：20単位以上（必修：12単位、選択：8単位以上）

※3 論文指導を受けた上、博士学位論文審査および最終試験に合格

(3) 機械工学専攻

①博士前期課程

科目区分			修了に必要な単位数	備考
専攻科目	研究科目		30単位	※1 ※2 ※3
	選択科目			
	論文指導科目			
	必修科目			

(備考)

※1 本大学院修士課程に2年以上在学

※2 修了に必要な単位数：30単位以上（必修：8単位、選択：22単位以上）

※3 論文指導を受けた上、修士学位論文審査および最終試験に合格

②博士後期課程

科目区分			修了に必要な単位数	備考
専攻科目	研究科目		20単位	※1 ※2 ※3
	選択科目			
	論文指導科目			
	必修科目			

(備考)

※1 本大学院博士課程に3年以上在学

※2 修了に必要な単位数：20単位以上（必修：12単位、選択：8単位以上）

※3 論文指導を受けた上、博士学位論文審査および最終試験に合格

(4) 電気工学専攻

①博士前期課程

科目区分			修了に必要な単位数	備考
専攻科目	研究科目		30単位	※1 ※2 ※3
	選択科目			
	論文指導科目			
	必修科目			

(備考)

※1 本大学院修士課程に2年以上在学

※2 修了に必要な単位数：30単位以上（必修：8単位、選択：22単位以上）

※3 論文指導を受けた上、修士学位論文審査および最終試験に合格

②博士後期課程

科目区分		修了に必要な単位数	備考
専攻科目	研究科目		20単位 ※1 ※2 ※3
	必修科目	2単位	
	選択科目	6単位	
	論文指導科目		
	必修科目	12単位	

(備考)

※1 本大学院博士課程に3年以上在学

※2 修了に必要な単位数：20単位以上（必修：14単位、選択：6単位以上）

※3 論文指導を受けた上、博士学位論文審査および最終試験に合格

(5) 環境システム学専攻

①博士前期課程

科目区分		修了に必要な単位数		備考		
専攻科目	研究科目		30単位	※1	※2	※3
	必修科目					
	選択科目					
	論文指導科目					
	必修科目					

(備考)

※1 本大学院修士課程に2年以上在学

※2 修了に必要な単位数：30単位以上（必修：10単位、選択：20単位以上）

※3 論文指導を受けた上、修士学位論文審査および最終試験に合格

②博士後期課程

科目区分			修了に必要な単位数	備考			
専攻科目	研究科目		20単位	※1	※2	※3	
	選択科目						8単位
	論文指導科目						
	必修科目						12単位

(備考)

※1 本大学院博士課程に3年以上在学

※2 修了に必要な単位数：20単位以上（必修：12単位、選択：8単位以上）

※3 論文指導を受けた上、博士学位論文審査および最終試験に合格

別表第5－2 学位授与の要件 人文学研究科

- (1) 国際コミュニケーション専攻
①博士前期課程

科目区分		修了に必要な単位数		備考
専攻科目	研究科目			※1 ※2 ※3
		必修科目	4 単位	
		選択科目	1 8 単位	
	論文指導科目			
		必修科目	8 単位	

(備考)

- ※1 本大学院修士課程に2年以上在学
※2 修了に必要な単位数：30単位以上（必修：12単位、選択：18単位以上）
※3 論文指導を受けた上、修士学位論文審査および最終試験に合格

- ②博士後期課程

科目区分		修了に必要な単位数		備考
専攻科目	特殊研究科目			※1 ※2 ※3
		選択科目	8 単位	
	論文指導科目			
		必修科目	1 2 単位	

(備考)

- ※1 本大学院博士課程に3年以上在学
※2 修了に必要な単位数：20単位以上（必修：12単位、選択：8単位以上）
※3 論文指導を受けた上、博士学位論文審査および最終試験に合格

別表第５－３ 学位授与の要件 経済学研究科
応用経済学専攻

科目区分		修了に必要な単位数		備考		
専攻科目	研究科目			30単位	※1	※2
	選択必修科目		4単位			
	選択科目		22単位			
	論文指導科目					
	必修科目		8単位		※3	

(備考)

- ※1 本大学院修士課程に2年以上在学
- ※2 修了に必要な単位数：30単位以上（必修：8単位、選択必修：4単位以上）
- ※3 論文指導を受けた上、修士学位論文審査および最終試験に合格

別表第5－4 学位授与の要件 情報学研究科

- (1) 情報学専攻
①博士前期課程

科目区分			修了に必要な単位数	備考
専攻科目	講義科目			3 0 単位 ※ 1 ※ 2 ※ 3
		選択科目	1 8 単位	
	論文指導科目			
		必修科目	1 2 単位	

(備考)

- ※ 1 本大学院修士課程に2年以上在学
※ 2 修了に必要な単位数：3 0 単位以上（必修：1 2 単位、選択：1 8 単位以上）
※ 3 論文指導を受けた上、修士学位論文審査および最終試験に合格

- ②博士後期課程

科目区分			修了に必要な単位数	備考
専攻科目	講義科目			2 0 単位 ※ 1 ※ 2 ※ 3
		選択科目	8 単位	
	論文指導科目			
		必修科目	1 2 単位	

(備考)

- ※ 1 本大学院博士課程に3年以上在学
※ 2 修了に必要な単位数：2 0 単位以上（必修：1 2 単位、選択：8 単位以上）
※ 3 論文指導を受けた上、博士学位論文審査および最終試験に合格

別表第5－5 学位授与の要件 教育学研究科

- (1) 教育学専攻
①博士前期課程

科目区分			修了に必要な単位数	備考
専攻科目	研究科目			3 0 単位 ※ 1 ※ 2 ※ 3
		選択科目	2 2 単位	
	論文指導科目			
		必修科目	8 単位	

- (備考)
※ 1 本大学院修士課程に2年以上在学
※ 2 修了に必要な単位数：3 0 単位以上（必修：8 単位、選択：2 2 単位以上）
※ 3 論文指導を受けた上、修士学位論文審査および最終試験に合格

- ②博士後期課程

科目区分			修了に必要な単位数	備考
専攻科目	研究科目			2 0 単位 ※ 1 ※ 2 ※ 3
		選択科目	8 単位	
	論文指導科目			
		必修科目	1 2 単位	

- (備考)
※ 1 本大学院博士課程に3年以上在学
※ 2 修了に必要な単位数：2 0 単位以上（必修：1 2 単位、選択：8 単位以上）
※ 3 論文指導を受けた上、博士学位論文審査および最終試験に合格

別表第5－6 学位授与の要件 心理学研究科

- (1) 心理学専攻
①博士前期課程

科目区分			修了に必要な単位数		備考		
専攻科目	研究科目		2 2 単位	3 0 単位	※ 1	※ 2	※ 3
	選択科目						
	実習科目						
	選択科目						
	論文指導科目						
	必修科目		8 単位				

- (備考)
※ 1 本大学院修士課程に2年以上在学
※ 2 修了に必要な単位数：3 0 単位以上（必修：8 単位、選択：2 2 単位以上）
※ 3 論文指導を受けた上、修士学位論文審査および最終試験に合格

- ②博士後期課程

科目区分		修了に必要な単位数		備考			
専攻科目	特殊研究科目			20単位	※1	※2	※3
		必修科目	2単位				
		選択科目	6単位				
	論文指導科目						
		必修科目	12単位				

- (備考)
※ 1 本大学院博士課程に3年以上在学
※ 2 修了に必要な単位数：2 0 単位以上（必修：1 4 単位、選択：6 単位以上）
※ 3 論文指導を受けた上、博士学位論文審査および最終試験に合格

別表第 5－7 学位授与の要件 建築学研究科
建築学専攻

科目区分			修了に必要な単位数		備考		
専攻科目	研究科目		30単位		※1 ※2 ※3		
	専門・応用科目	18単位					
	演習・実験科目						
	論文指導科目		12単位				
必修科目							

(備考)

- ※1 本大学院修士課程に2年以上在学
- ※2 修了に必要な単位数：30 単位以上（必修：12 単位、選択：18 単位以上）
- ※3 研究指導を受けた上、修士学位論文又は修士設計（特定課題研究）の審査および最終試験に合格

別表第 6－1 修士学位論文の主題等の提出時期

研究科	時期
理工学研究科	1 月中旬
人文学研究科	4 月下旬
情報学研究科	春学期 1 月下旬、秋学期 6 月下旬
教育学研究科	1 2 月下旬
経済学研究科	4 月下旬
心理学研究科	4 月下旬
建築学研究科	1 月中旬

別表第 6－2 修士学位授与の申請時期

研究科	時期
理工学研究科	2 月上旬
人文学研究科	1 月上旬
情報学研究科	春学期 2 月上旬、秋学期 7 月上旬
教育学研究科	2 月上旬
経済学研究科	1 月上旬
心理学研究科	1 月上旬
建築学研究科	2 月上旬

別表第 7－1 博士学位請求論文の主題等の提出時期

研究科	時期
理工学研究科	1 1 月下旬
人文学研究科	4 月下旬
情報学研究科	春学期 1 1 月下旬、秋学期 4 月下旬
教育学研究科	7 月中旬
心理学研究科	4 月下旬

別表第 7－2 博士学位授与の申請時期

研究科	時期
理工学研究科	2 月上旬
人文学研究科	1 1 月下旬
情報学研究科	春学期 2 月上旬、秋学期 7 月上旬
教育学研究科	1 1 月下旬
心理学研究科	1 1 月下旬

※論文博士の申請については各研究科で受理する。

別表第8-1 成績の評価、評語、評価点数、評価基準及びGP

評価 学則で 定める評価	評語 成績通知 記載	評価点数	評価基準	GPA区分	GP	合否等
S	S	100点～90点	学生が、授業の到達目標を十分に達成した上で、極めて優秀な成果を挙げた。	対象	4.0	合格
A	A	89点～80点	学生が、授業の到達目標を十分に達成した上で、優秀な成果を挙げた。		3.0	
B	B	79点～70点	学生が、授業の到達目標を十分に達成した。		2.0	
C	C	69点～60点	学生が、授業の到達目標を最低限の水準で達成した。		1.0	
F	F	59点以下	学生が、授業の到達目標を達成しなかった。	対象	0.0	不合格
	K	－	欠席回数が授業時数の3分の1未満の学生が、試験を欠席した。			
	X	－	学生が、授業時数の3分の1以上欠席した。			
－	I	－	学生の病気等やむを得ない事由により、成績発表時期までに成績評価が間に合わなかった。	対象外	－	保留
－	T	－	学生が他大学および他大学院にて取得した単位を、本大学院が認定した。	対象外	－	－

別表第8-2 成績評価確認 申請条件

条件	
1	当該科目は「履修登録」をした科目である。
2	当該科目の授業中に課せられたレポート等成果物を全て提出している。及び授業期間内で随時行われた試験を全て受験している。
3	当該科目の定期的に行う試験を受験している。